

大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)

県営農免農道整備事業(大崎中央2期地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

み とう A い せき  
美 堂 A 遺 跡

2006年2月

鹿児島県大崎町教育委員会



古墳時代出土遺物

# 序 文

この報告書は、県営農免農道整備事業（大崎中央2期地区）に伴い、大崎町教育委員会が主体となり、平成14度を実施した埋蔵文化財包蔵地の発掘調査の成果をまとめたものです。

本町でも1名の埋蔵文化財専門職員を中心に発掘調査にあたっておりましたが、当教育委員会としては調査体制が充分でないため、調査にあたっては、行政的な部分や、また現場での技術指導において、様々な各関係機関の皆様に多大なるご指導、ご支援を賜りました。その甲斐あってようやくこの報告書が形あるものに仕上がり、郷土の歴史を知る貴重な一資料ができました。この報告書がさらに本町の郷土史を究明していく資料として役立てられれば幸いです。

ここに、調査担当者・指導者・作業協力者をはじめ、ご協力賜りました地域住民の皆さま並びに各関係機関の皆さまに、心から厚く御礼申し上げます。

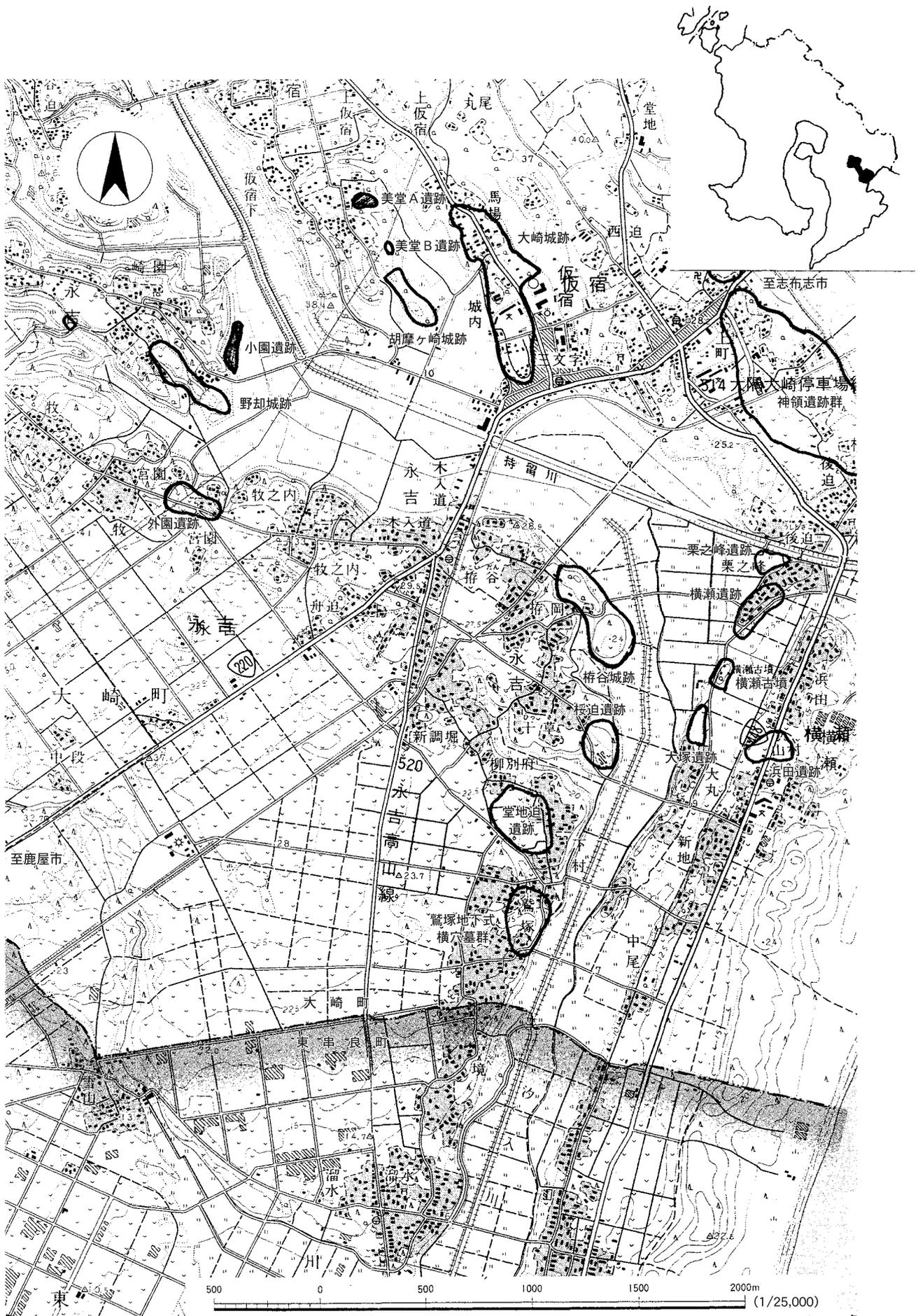
平成18年2月

大崎町教育委員会

教育長 諸 木 逸 郎

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	みどうえーいせき							
書名	美堂A遺跡							
副書名	県営農免農道整備事業(大崎中央2期地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	6							
編著者名	内村憲和							
編集機関	大崎町教育委員会							
所在地	〒899-7305 鹿児島県曾於郡大崎町仮宿1029番地							
発行年月日	2006年2月28日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みどうえーいせき 美堂A遺跡	かごしまけん 鹿児島県 そおくん 曾於郡 おおさきちよう 大崎町 かりじゃくあざ 仮宿字 みどう 美堂	464686	70-49	31° 25′ 48″	130° 59′ 56″	確認・全面調査  20020508～20020717	確認調査 38 m <sup>2</sup> 全面調査 560 m <sup>2</sup>	農道整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
美堂A遺跡	集落跡	古墳時代  中世  近世		古道, 土杭, 土器片群  古道, 柱穴		成川式土器  土師質土器, 東播系捏鉢, 青磁, 白磁, 備前系陶器, 常滑焼, 砥石, 軽石製品  薩摩焼, 染付		



美堂A遺跡・小園遺跡の位置と周辺遺跡

## 総目次

第Ⅰ章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 発掘調査の経過と概要	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と自然環境	7
第1節 遺跡の位置と地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3節 層序	9
第4節 美堂A遺跡の地形	9
第Ⅲ章 調査の概要	12
第1節 古墳時代の概要	12
第2節 中世の概要	27
第3節 近世の概要	33
第Ⅳ章 調査のまとめ	38
図版	39
あとがき	

## 挿図目次

第1図 美堂A遺跡の範囲とトレンチの配置	4
第2図 美堂A遺跡全面調査の範囲及びグリッド配置図	5
第3図 小園遺跡の範囲とトレンチの配置	6
第4図 美堂A遺跡 古墳時代遺構検出面の地形図及び土層堆積図	10
第5図 古墳時代遺構配置図	12
第6図 古墳時代遺物出土状況図	13・14
第7図 古道実測図	15
第8図 土坑実測図	16
第9図 土器片群出土遺物(1)	17
第10図 土器片群出土遺物(2)	18
第11図 土器片群出土遺物(3)	19
第12図 古墳時代包含層出土遺物(1)	22
第13図 古墳時代包含層出土遺物(2)	23
第14図 古墳時代包含層出土遺物(3)	24
第15図 中世遺構配置図	27
第16図 古道実測図	28
第17図 古道出土遺物	29
第18図 柱穴実測図	30
第19図 中世包含層出土遺物	31
第20図 近世遺構配置図	33
第21図 方形土坑実測図及び出土遺物	34
第22図 近世包含層出土遺物(1)	35
第23図 近世包含層出土遺物(2)	36

## 表目次

第1表 美堂A遺跡と小園遺跡及び周辺遺跡の地名表	11
第2表 土器片群出土遺物観察表(1)	17
第3表 土器片群出土遺物観察表(2)	20
第4表 古墳時代包含層出土遺物観察表	25
第5表 古道出土陶磁器観察表	29
第6表 古道出土石器計測表	29
第7表 中世包含層出土陶磁器観察表	32
第8表 中世包含層出土石器計測表	32
第9表 方形土坑出土陶器観察表	34
第10表 近世包含層出土陶磁器観察表	37
第11表 近世包含層出土真鍮製品計測表	37

## 図版目次

巻頭図版 古墳時代出土遺物	
図版1 C区古墳時代遺物出土状況/D区古墳時代遺物出土状況/土器片群1・2	39
図版2 古墳時代 ①古道・②土坑/中世 ③古道遺物出土状況・④古道完掘状況・⑤柱穴/近世 ⑥方形土坑及び柱穴・⑦方形土坑/⑧土層断面(1トレンチ)	40
図版3 古墳時代出土遺物(1)	41
図版4 古墳時代出土遺物(2)	42
図版5 中世古道出土遺物/中世包含層出土遺物	43
図版6 近世出土遺物	44

## 例 言

1. この報告書は、大崎町教育委員会が平成14年度に大隅耕地事務所の受託事業として実施した「県営農免農道整備事業（大崎中央2期地区）」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、大崎町教育委員会が調査主体となって実施した。
3. 本書で用いたレベルは海拔絶対高である。
4. 遺物番号は遺跡ごとで通し番号とし、本文・挿図・図版の番号は一致する。
5. 挿図の縮尺は各図に示してあるとおりである。
6. 発掘調査における測量・実測・写真撮影は内村・出原・清水・古田で行った。整理作業における掲載遺物の選定、実測・トレースは、内村・出原・清水・日高が行った。
7. 古墳時代の遺物の分類については鹿児島大学埋蔵文化財調査室の中村直子氏、鹿児島県埋蔵文化財センターの前迫亮一氏の指導を受けた。中世の陶磁器の分類については鹿児島県埋蔵文化財センターの中村和美氏に、近世の薩摩焼については同センターの関明恵氏に指導を受けた。
8. 遺物写真撮影については鹿児島県埋蔵文化財センター西園勝彦氏の指導のもと行った。
9. 本書の執筆・編集は内村が行った。

# 第 I 章 調査の経過

## 第 1 節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県農政部（大隅耕地事務所）は、大隅中央区域においてを計画し、農免農道建設事業区内の埋蔵文化財の有無について、平成 6 年に鹿児島県教育庁文化財課（以下、県文化財課）に照会した。

これを受けて平成 7 年 3 月に県文化財課と大崎町教育委員会（以下、町教育委員会）は事業計画区域の分布調査を行ったところ、美堂 A 遺跡と小園遺跡が存在することが判明した。

この結果をもとに平成 13 年 11 月に県文化財課と大隅耕地事務所、町教育委員会の三者で協議を行い、美堂 A 遺跡と小園遺跡について、事業着手前に確認発掘調査（以下、確認調査）を実施することになった。また、美堂 A 遺跡については平成 14 年度工事着手が決まっていたため、確認調査の結果次第全面調査による記録保存を行うこととなった。また、小園遺跡については事業区域が沖積地であったため、試掘による遺構・遺物の有無を行うこととなった。確認調査は町教育委員会が主体となって実施した。

確認調査の結果、美堂 A 遺跡で遺物が確認され、遺物包含層が良好に残存していることが判明したため、全面調査による記録保存を図ることとなった。小園遺跡は遺構・遺物が確認されなかった。

調査及び整理作業、報告書作成は町教育委員会が主体となって実施した。

### 平成 14 年度

#### 美堂 A 遺跡確認調査・全面調査

平成 14 年 5 月 8 日～平成 14 年 7 月 17 日

（労働実日数 48 日）

#### 小園遺跡確認調査

平成 14 年 12 月 28 日

### 平成 17 年度

#### 美堂 A 遺跡報告書作成

平成 16 年 4 月 1 日～平成 17 年 2 月 28 日

## 第 2 節 調査の組織

（平成 14 年度）

### 美堂 A 遺跡 確認調査・全面調査

#### 小園遺跡 確認調査

調査責任者	町教育委員会教育長 久木田 瑞 夫
調査事務	町教育委員会社会教育課長 笠 木 直 幸 " 課長補佐 今 宮 信 雄
調査担当者	町教育委員会社会教育課主事 内 村 憲 和

（平成 17 年度）

### 美堂 A 遺跡報告書作成

調査責任者	町教育委員会教育長 諸 木 逸 郎
調査事務	町教育委員会社会教育課長 今 宮 信 雄 " 課長補佐 二 見 誠 弘
調査担当者	町教育委員会社会教育課主任 内 村 憲 和
調査指導	鹿児島大学埋蔵文化財調査室 中 村 直 子 鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財主事 前 迫 亮 一 文化財主事 中 村 和 美 文化財主事 関 明 恵

（発掘作業員）

久保 敬二	東平一美	東平鉄夫	松永正夫
出田 国男	時吉忠義	山内 繁	下野幹生
西浜 栄	時吉慶二	小牧清治	西丸睦男
駒水一男	徳留重三	中村辰雄	神戸ナリ子
湯又 薫	青山 保	松永和之	久富木稔子
関屋福吉	原田國夫	本村 登	藤井義昭
本村勇夫	領家ヒデ	福原フミ	寺園 実
玉利セツ子	小野タミ子	上村千津	福留エチ子
上村貞子	徳永エミ	有村ヒデ	甲斐崎倫子

假水いつ子 新越ツヤ子 郷萬ヒツエ 上 档 文 夫  
小田テルエ 郡 山 エ ミ 徳 富 久 子 常 福 照 男  
神 崎 進 諸 木 和 子 西 浜 エ チ 子 領 家 ト シ 子  
久保ノブエ 中 村 咲 子 山 内 ミ チ エ 領 家 ト ヨ 子  
上 橋 チ ズ 入 部 政 光 富 永 ム ツ 子 宮 下 敏 男  
今給黎シズエ 中 島 末 熊 小 野 貞 雄 原 口 守  
入部ツルエ 神 戸 三 郎 郷 萬 政 義 上 档 ノ リ 子  
浜 屋 美 利 宝 満 サ チ 子 杉 山 ツ ル エ 馬 場 洋 二  
米 沢 勇 満 石 勉 磯 脇 サ エ 留 森 久 男  
奥 園 ノ リ 近 藤 信 夫

(以上 社団法人大崎町シルバー人材センター)

(実測・整理作業員)

出原ふじ子 清 水 優 子 古 田 由 香 日 高 ゆ う 子

### 第3節 発掘調査の経過と概要

#### 1. 美堂A遺跡

確認調査は平成14年5月8日から1～4トレンチ(第1図 ● 1～4 T)を設定し、重機で表土を除去した後人力による掘り下げを行った。1トレンチでは、表土層下層はすでにⅢ層であり、Ⅲ層中から古墳時代の土器が出土した。1トレンチについては、Ⅻ層まで掘り下げたが、古墳時代以前の遺構・遺物は確認されなかった。

2トレンチにおいてもⅢ層中で古墳時代の遺物が出土した。3トレンチは表土下層がⅫ層であり、Ⅱ～Ⅻ層まですでに削平されている状態であった。Ⅻ層まで掘り下げたが、遺構・遺物は確認されなかった。

4トレンチは表土層下層がⅣ層であった。Ⅻ層まで掘り下げたが、遺構・遺物は確認されなかった。

なお、美堂A遺跡では同時期に団体営シラス対策事業(仮宿地区)の排水路工事着手も予定されており、美堂A遺跡の範囲に事業区の一部が含まれていたため、この部分についても事業区内に1～6トレンチを設定し、確認調査を行った。農免農道整備事業とは直接関連する事業ではないが、美堂A遺跡が残存する範囲をより明確にするため、併せてこれについての概要についても述べることとする。

団体営シラス対策事業におけるトレンチの配置は第1図のとおりである(■の1～6 T)。1～3トレンチについては表土層下がⅫ層であった。すでに古墳時代の遺物包含層は失われており、遺構・遺物は確認されなかった。1～3トレンチはⅫ層から掘り下げを行ったが、縄文時代早期以前の遺構・遺物も確認されなかった。4トレンチはⅨ層上面まで掘り下げたが、遺構・遺物は確認されなかった。5・6トレンチではⅣ・Ⅴ層から古墳時代の遺物が出土した。

確認調査の結果をもとに農免農道建設事業区内に全面調査区を設定し(第2図)、平成13年5月29日から記録保存のための調査を行った。調査は排土搬出の関係で、東側から調査を行った。全面調査時は調査区東側からA～D区の5区に分け、グリッドを設定せず、計画路線のセンターポイントを基準に測量を行った。10×10mのグリッドは報告書作成時に図面上で設定したものである。なお、グリッドは東西の軸をセンターポイントNo.35とBC.9-1を結ぶ線を基軸とし、H-1・2、I-1・2の交点とセンターポイントNo.35は一致する。

#### 2. 小園遺跡

小園遺跡の確認調査は、平成14年12月28日に実施した。調査は1×2mのトレンチを8箇所(1～8 T)を設定し(第3図)、重機で少しずつ掘り下げを行い、遺構・遺物の有無を確認した。掘り下げは、腐食した草木の堆積する泥炭層まで行った。

調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。

なお発掘調査の経過については日誌抄にて記載する。

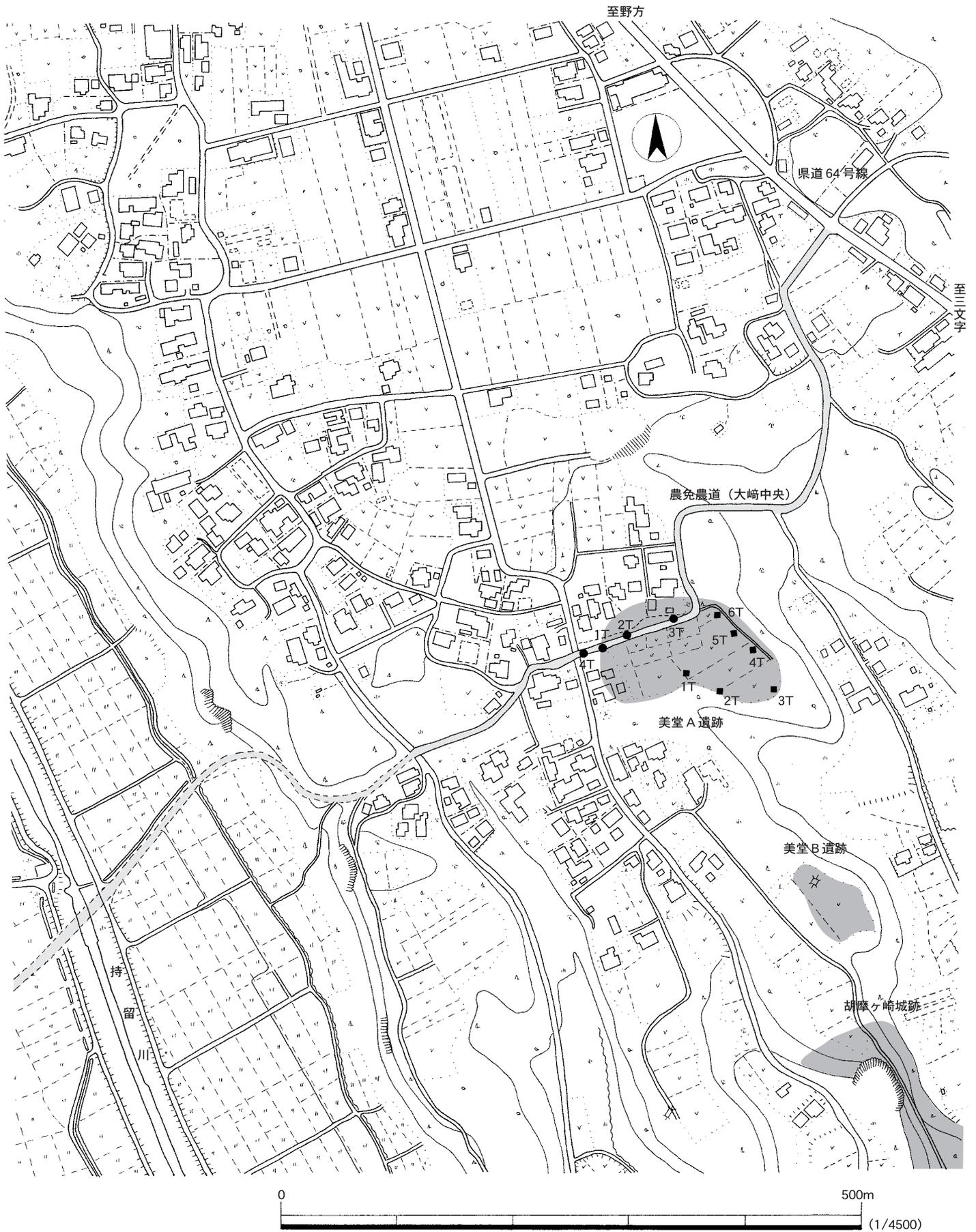
日誌抄

美堂A遺跡（確認調査：平成14年5月8日～6月6日 全面調査：平成14年5月29日～7月17日）

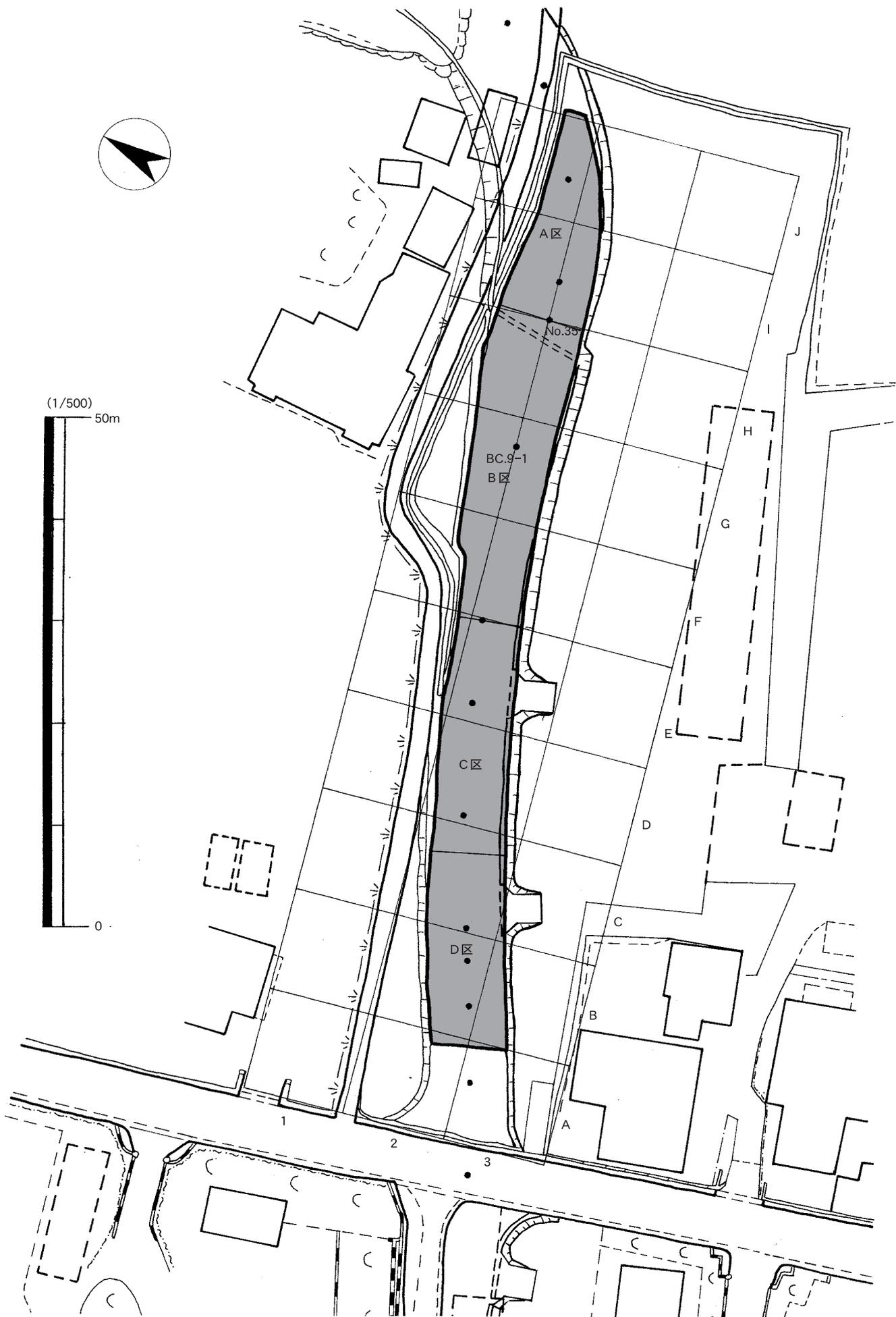
調査日	曜日	天候	作業内容
5月8日	水	晴れ	表土はぎ。現場の整備。1・2T設定、掘り下げ。
5月9日	木	晴れ/曇り	1・2T掘り下げ。3T設定、掘り下げ。
5月10日	金	雨	発掘作業休み。レベル移動。
5月13日	月	晴れ	1～4T掘り下げ。1・2Tの遺物出土状況写真・平板(1/50)・レベル実測・取上げ。
5月14日	火	曇り/雨	1～4T掘り下げ。
5月15日	水	晴れ	1～4T掘り下げ。2Tの遺物の平板実測(1/50)・レベル・取上げ。4T終了。
5月16日	木	晴れ	1～3T掘り下げ。1T池田軽石層上面で精査。遺構見つからず。
5月17日	金	晴れ	2・3T掘り下げ。2T層位確認のため、ミニトレンチ設定。
5月20日	月	晴れ	2・3T掘り下げ。
5月21日	火	晴れ	1T土層断面図作成。2Tの遺物出土状況の平板(1/50)・レベル実測・取上げ。
5月22日	水	曇り/雨	2・3T掘り下げ。
5月23日	木	雨	現場休み
5月24日	金		大崎町シルバー人材センター総会のため発掘作業員休み
5月27日	月	晴れ	2・3T掘り下げ。2Tの遺物出土状況の平板(1/50)・レベル実測・取上げ。
5月28日	火	晴れ	2・3T掘り下げ。
5月29日	水	晴れ	全面調査開始。東側から表土はぎ。調査区の清掃。A区は池田軽石層上面で終了。2T終了
5月30日	木	曇り/雨	表土はぎ。ベルトコンベア設置。雨のため午後2時で中止。3T掘り下げ。
5月31日	金		調査員、地区文化財保護審議会総会出席のため現場休み
6月3日	月	晴れ(多湿)	調査区の精査。B区西側で溝状遺構検出。3T掘り下げ。
6月4日	火	晴れ	B区中央部のⅡ層を掘り下げ。近世遺物出土。3T掘り下げ。
6月5日	水	晴れ	溝状遺構の精査・検出写真撮影のち掘り下げ。B区中央のⅡ・Ⅲ層掘り下げ。3T掘り下げ。
6月6日	木	晴れ	B区のⅡ・Ⅲ層掘り下げ。遺物出土状況写真・平板(1/50)・レベル実測・取上げ。近世土坑検出。3T終了。
6月7日	金	晴れ	B・C区のⅢ層掘り下げ。遺物が出ないため3箇所ミニトレンチを設定し、池田軽石層まで確認。
6月10日	月	曇り・雨	センターポイントの設置。B・C区の掘り下げ。台風対策。
6月11日	火	大雨(強風)	台風影響残る。現場水浸しのため休み。
6月12日	水	晴れ	近世土坑掘り下げ。実測図作成。周辺の遺物出土状況の平板(1/50)・レベル実測・取上げ。
6月13日	木	晴れ	C区の掘り下げ。Ⅲ層遺物出土状況の写真撮影・平板(1/50)・レベル実測・取上げ。
6月14日	金	晴れ	C区Ⅲ層遺物出土状況の写真撮影・平板(1/50)・レベル実測・取上げ。C区Ⅳ層掘り下げ。
6月17日	月	晴れ	C区Ⅲ層遺物出土状況の平板(1/50)・レベル実測・取上げ。C区Ⅳ層掘り下げ。
6月18日	火	晴れ	発掘作業休み。C区Ⅲ層遺物出土状況の平板(1/50)・レベル実測・取上げ。
6月19日	水	晴れ	C区Ⅲ層遺物出土状況の平板(1/50)・レベル実測・取上げ。C区Ⅳ層掘り下げ。
6月20日	木	晴れ	C区Ⅳ層遺物出土状況の写真撮影・平板(1/50)・レベル実測・取上げ。C区Ⅴ層掘り下げ。
6月21日	金	晴れ	C区Ⅴ層掘り下げ。
6月24日	月	曇り	溝状遺構(古道)と近世土坑の完掘写真撮影・実測図作成。A・B区の完了写真撮影。B区Ⅳ層掘り下げ。
6月25日	火	曇り	C区Ⅴ層掘り下げ。
6月26日	水	曇り	C区Ⅴ層掘り下げ。Ⅴ層遺物出土状況の写真撮影・
6月27日	木	晴れ	C区Ⅴ層遺物出土状況の平板(1/50)・レベル実測・取上げ。C区Ⅴ・Ⅵ層掘り下げ。
6月28日	金	雨	C区Ⅴ・Ⅵ層掘り下げ。Ⅵ層で遺物の出土のない箇所を重機で掘り下げ。下層確認。
7月1日	月	晴れ	C区Ⅴ・Ⅵ層遺物出土状況の平板(1/50)・レベル実測・取上げ。B区Ⅳ層掘り下げ。
7月2日	火	晴れ	B区アカホヤ火山灰層上面で柱穴検出。掘り下げ。写真撮影・実測図面作成。C区Ⅵ層上面で土坑検出のち掘り下げ。実測図作成。
7月3日	水	曇り	D区表土はぎ。D区Ⅳ・Ⅴ層掘り下げ。
7月4日	木	曇り	D区Ⅳ・Ⅴ層掘り下げ。土層断面図作成。
7月5日	金	曇り	D区Ⅳ・Ⅴ層掘り下げ。
7月8日	月	曇り	D区Ⅳ・Ⅴ層掘り下げ。硬化面検出のち掘り下げ。台風対策。
7月9日	火	曇り	D区Ⅳ・Ⅴ層遺物出土状況写真撮影。台風接近のため午後中止。
7月10日	水	晴れ(高温)	D区Ⅳ・Ⅴ層遺物出土状況の平板(1/50)・レベル実測・取上げ。串良商業高校3名職場体験。
7月11日	木	晴れ	D区土器集中区の精査。D区西側から池田軽石層上面精査。串良商業高校3名職場体験。
7月12日	金	晴れ	D区土器集中区の写真撮影。出土状況の平板(1/50)・レベル実測・取上げ。
7月15日	月	晴れ	D区古道の実測図作成。D区西側Ⅵ層掘り下げ。
7月16日	火	晴れ	現場撤収準備。D区完了写真撮影。
7月17日	水	晴れ	現場撤収。調査終了。

小園遺跡(確認調査:平成14年12月28日)

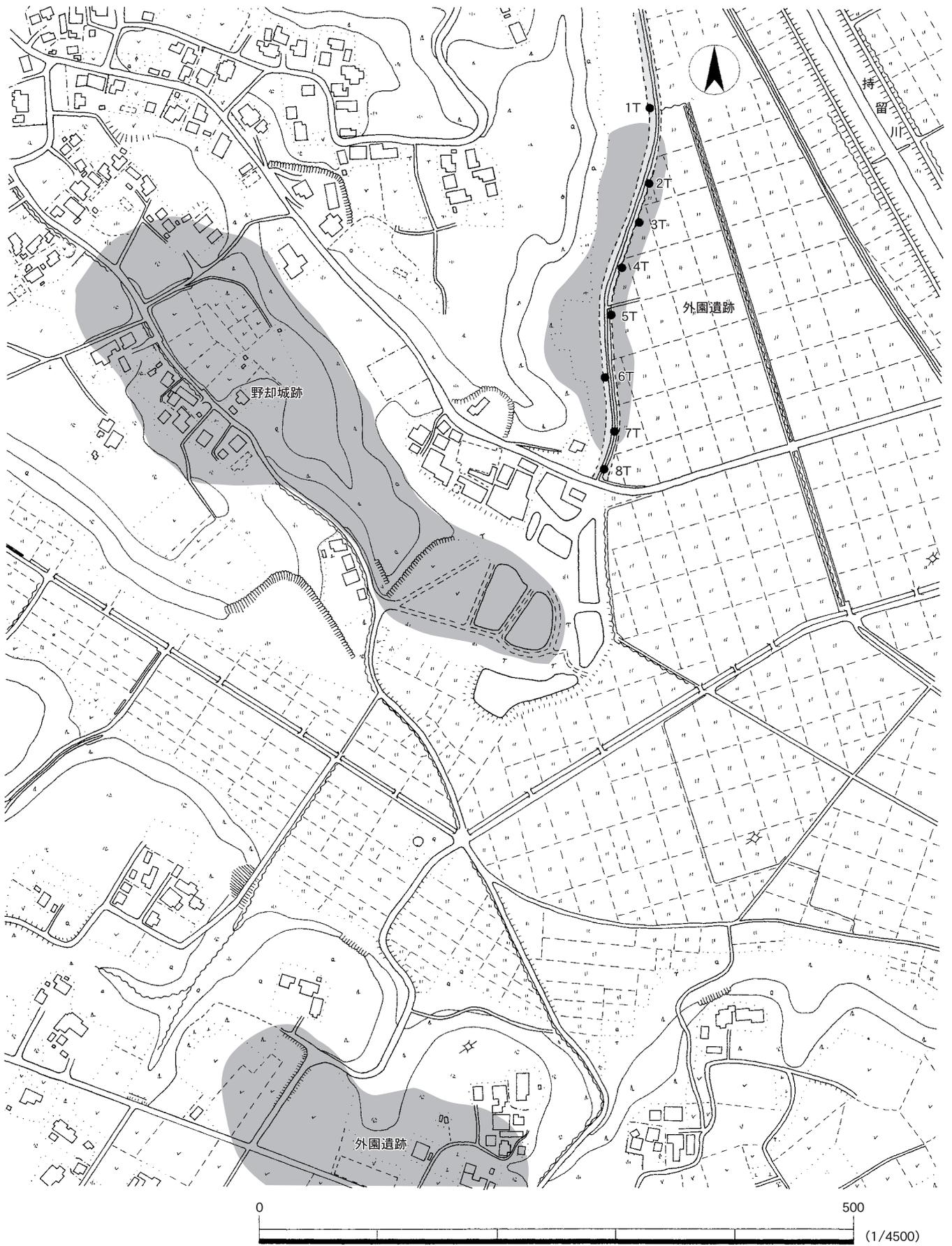
12月28日	水	曇り	1～8T設定。重機による掘り下げ。トレンチの写真撮影・土層記録のち埋め戻し。調査終了。
--------	---	----	---



第1図 美堂A遺跡の範囲とトレンチの配置



第2図 美堂A遺跡全面調査の範囲とグリッド配置図



第3図 小園遺跡の範囲とトレンチの配置

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と自然環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

大崎町は鹿児島県の南東部、曾於郡の南西部に位置し、総面積は100.82km<sup>2</sup>、東西に約8km、南北に約18kmとなっている。東は有明町、西は鹿屋市、肝属郡串良町、東串良町、北は大隅町、輝北町に接し、南東は志布志湾に臨んでいる。

志布志湾は、宮崎県都井岬を湾口とする半円状の湾であり、砂浜と岩礁海岸が交互に連なる。本町は砂丘海岸のほぼ中央部にあたり、菱田川河口から南西に弧状を描く約7kmの海岸線を持つ。南北に細長い本町では、南部は志布志湾から北に向かって緩やかな勾配をなし、北部は標高150mから180mの丘陵地帯となっている。さらに北端部に至っては谷間の多い起伏の激しい地形を構成している。また菱田川、田原川、持留川が南流し、志布志湾に注いでいる。南部はこの3河川に沿って水田地帯がひらけ、その中間の大地が畑地を形成している。北部は大鳥川が蛇行しながら有明町へと流れており、山林、原野の多い地帯となっている。地質は、この地帯特有のシラス土壌の上に形成された黒色火山灰土壌が多い。本町は志布志湾に面しているため、黒潮の影響を受けて温暖な気象状況に恵まれており、年間平均気温17.2度、高温多湿で農作物の育成に適した風土である。

美堂A遺跡は大字仮宿に所在し、仮宿台地の西部に位置する。この地帯は、3つの細かい台地が南側に突出し、美堂A遺跡の所在する台地の先端部分には中世の胡摩ヶ崎城跡が存在する。美堂A遺跡の標高は約37mである。本遺跡の西側約500mのところに持留川が流れている。

小園遺跡は大字永吉に所在し、永吉台地の東側の沖積地に位置する。東側に持留川を臨む。遺跡は台地下の河川部分よりやや微高地になっている。場所を中心に広がる。標高は8～12mである。なお小園遺跡西側の台地には野卸城跡が存在する。

### 第2節 歴史的環境

大崎町における遺跡の分布は、主に田原川、持留川、菱田川、大鳥川を臨む台地の縁辺部に沿って分布している。大崎町内で現在刊行されている報告書は『神領地下式横穴群5号』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)、『神領地下式横穴6号』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)、『立山B遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)、『金丸城跡』大崎町埋蔵文化財調査報告書(4)、『下堀遺跡・大崎細山田段遺跡』大崎町埋蔵文化財報告書(5)である。これまでの町内の歴史はほとんど現存する文献資料等に頼らざるを得ず、特に古代以前になれば、町内の採取遺物でのみ推測するしかなかった。しかし近年の開発事業の増加に伴い、発掘調査の件数も増えており、発掘調査が進むにつれ、少しずつ町内の歴史が明らかになりつつある。

#### 1. 旧石器時代

町内においては未だ旧石器時代に関する遺物・遺構は確認されていない。

#### 2. 縄文時代

町内で縄文時代の遺跡は、周知の遺跡内に縄文時代後期の土器片が確認されているものがほとんどである。本格的な調査で縄文時代の遺物・遺構が確認されている例は立山B遺跡、下堀遺跡、細山田段遺跡のほか、二子塚A遺跡がある。

平成10年度から11年度にかけて行われた立山B遺跡の調査では、前期の曾畑式土器、中期の阿高式土器、晩期の黒川式土器が出土した。

平成13年度から15年度にかけて調査を行った下堀遺跡では、調査区西側部分において早期の土器が出土し、13基の集石遺構が発見された。また同遺跡では指宿式土器もわずかながら出土している。また、細山田段遺跡でも土坑2基と西平式土器がある。

#### 3. 弥生時代

平成11年度に調査を行った益丸の字松原にある沢目遺跡は、砂丘に埋没した弥生時代中期から弥生

時代終末期にかけての遺跡であり、約1,500㎡の調査区域に53軒の住居址や約20基の土坑、約180基の柱穴が発見された。また、出土遺物としては入来式Ⅰ・Ⅱ式土器、山ノ口Ⅰ・Ⅱ式土器を中心に弥生土器が出土し、鉄製品、軽石製の加工品も出土した。その他須玖式土器も出土し、九州北部方面との交流があったことが示唆される。

下堀遺跡の調査においても山ノ口式土器を中心とする中期の土器が出土し、大型住居跡が2基出土した。なおこの大型住居跡からは須玖式土器も確認されている。この他土坑を伴う掘立柱建物跡が5基発見された。

平成14年度に町道の拡幅工事の立会いで調査した桜迫遺跡においても山ノ口式土器が出土した。田原川・持留川沿いには弥生土器片の散布地としての遺跡が多く点在し、特に河口付近に当たる横瀬地域は甕棺破片が採集された。

#### 4. 古墳時代

横瀬エサイ町には昭和18年9月に国の指定を受けている横瀬古墳がある。古墳時代中期（5世紀後半頃）の大型前方後円墳であり、県内で肝属郡東串良町唐仁大塚古墳について2番目に大きい。平成2年に行われた鹿児島大学と琉球大学の測量調査では、全長160m、墳長132m、前方部幅72m、前方部長68m、後円部径64m、くびれ部幅48mを測るものとしている。墳丘からは円筒埴輪片、象形埴輪等が出土している。また昭和53年に鹿児島県教育委員会文化課の範囲確認調査で周濠跡も確認された。その周濠内から須恵器片が出土し、これらは伽耶系陶質土器及び大阪府陶邑産須恵器と言われている。

明治35年に盗掘を受けているが、その際に腐食した直刀や鎧、勾玉類が出土し、石室内は朱塗りであったと言われている。

神領遺跡群の中にある神領古墳群では、現在前方後円墳4基、円墳9基、地下式横穴墓8基が確認されている。6号墳からは日光鏡・沓製獣帯鏡各1面が採集され、昭和43年の調査では、石室は花崗岩質板石6枚を使用した組合せ石棺で、鉄剣、鉄刀、

鏡等が副葬されていたことが判明した。神領地下式横穴墓は、昭和35年に1号が調査された。調査の結果によれば長方形、家形の玄室で羨道部取り付けは妻入りである。副葬品として鉄剣、骨製、イモガイ製貝釧、内向花文鏡が、本県内で鏡を副葬したものはこの地下式横穴だけである。昭和55年、62年に県文化課によって3～5号が調査された。5号からイモガイ製貝釧が1対出土した。平成2年に6号の調査が行われ、玄室内に人骨が出土した。

本町における地下式横穴は他に飯隈遺跡群の飯隈地下式横穴群、鷲塚地下式横穴群がある。また、本町に存在する高塚古墳は飯隈遺跡群の飯隈古墳群に9基、田中古墳群に3基、野方の後迫古墳群に2基存在する。なお神領と飯隈における高塚古墳と地下式横穴は、混在して分布する。

平成11年度に実施した二子塚遺跡Aにおいては、古墳時代の住居跡と共に土師器、成川式土器などの遺物が確認されている。また、平成11年度に調査した沢目遺跡においても古墳時代初頭の住居址が7基確認され、布留式土器を真似て作られたものと思われる土師器が出土した。

下堀遺跡の調査では、古墳時代の地下式横穴墓が7基発見され、2号には鉄剣、鉄鏃、異形鉄器が、6号には鉄剣が副葬されていた。

#### 5. 中世・近世

町内には中世の遺跡としてはほとんどが山城である。『中世の山城』に挙げられている町内の山城としては、大崎城跡、胡摩ヶ崎城跡、野卸城跡、龍相城跡（神領遺跡群内）、金丸城跡、天守城跡、梶谷城跡、遠見ヶ丘跡がある。『中世の山城』で掲載されているもの以外では、栢山城後、松尾城跡、梶井城跡、天ヶ城跡があるが、所在の推測がなされているが、実態は明らかにされていない。

金丸城跡の調査では青磁、白磁、青花や備前系の陶器が出土した。また近世のものでは唐津焼、肥前系染付、薩摩焼が出土した。

下堀遺跡でも中世の土坑に伴い、青磁、青花、中国陶器が出土した。

### 第3節 層序

#### 1. 美堂A遺跡の基本層序

確認調査・本調査をもとに確認した基本的な層序は以下のとおりである。美堂A遺跡発掘調査では土層をⅩⅧ層に分けた。

- I層 現代の耕作土。
- Ⅱ層 白色軽石粒子混灰褐色軟質土。近世の遺物包含層。
- Ⅲ層 黒褐色軟質土。古墳時代～中世の遺物包含層。
- Ⅳ層 暗黒褐色軟質土。古墳時代の遺物包含層。
- Ⅴ層 黒色軟質土。古墳時代の遺物包含層。
- Ⅵ層 黒褐色土。古墳時代の遺物包含層。
- Ⅶ層 黒褐色土。Ⅵ層よりやや軟質。
- Ⅷ層 明褐色土。パミスの粒子が多い。
- Ⅸ層 黒色土。
- X層 黒色土。Ⅸ層よりしまりがある。
- Ⅺ層 軽石粒子混黒色土。
- Ⅻ層 黒色土。X層よりやや明るい。
- Ⅼ層 池田火山灰層。約5,500年前の池田湖起源となる火山の噴出物。
- Ⅽ層 暗褐色土。XⅢ層とXⅤ層の混ざり。
- Ⅾ層 アカホヤ火山灰層。約6,400年前の鬼界カルデラの噴出物。a～dの4層に細分できる。
  - a 暗橙色土。
  - b 明橙色火山灰層。
  - c 黄白色砂質層。
  - d 明黄橙色軽石層
- ⅰ層 暗褐色土。
- ⅱ層 暗黒褐色土。P-11を含む。
- ⅲ層 暗黄褐色粘質土。
- ⅳ層 サツマ火山灰。約11,000年前の桜島起源となる火山の噴出物。
- ⅴ層 暗灰褐色粘質土。1cm程の赤橙色のパミスを含む。
- ⅵ層 灰褐色粘質土。

なお、この基本層序はC区の層序を基本として作成されている。C区の遺構検出はⅧ層で行ったが、D区ではⅧ層の堆積がほとんど無かったため、ⅩⅧ層上面で検出を行った。C・D区の土層断面は第4図に示してある。

#### 2. 小園遺跡の基本層序

確認調査で得られた小園遺跡の事業区域における

基本層序は以下のとおりである。

- I層 表土。(約30cm)
- Ⅱ層 灰白色泥質土。(約30cm)
- Ⅲ層 黒色泥質土。(約30cm)
- Ⅳ層 黒色泥質土。腐食した植物の堆積層。(約100m)

### 第4節 美堂A遺跡の地形

美堂A遺跡全面調査区の前古墳時代遺構検出面の地形は第4図のとおりである。なお、C区はⅧ層上面、A・B・D区はⅩⅧ層上面で記録された標高で作成されている。

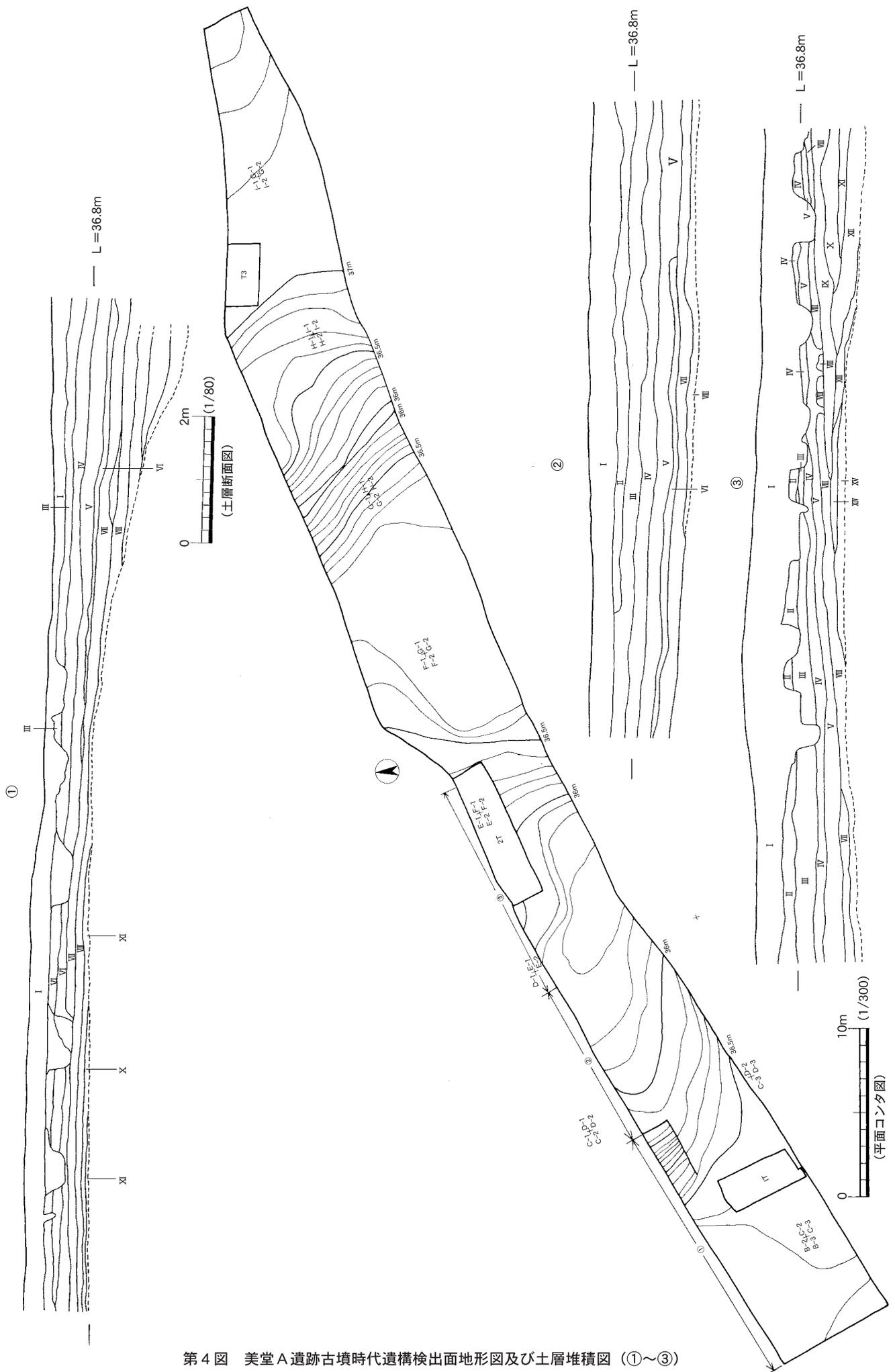
B-2・3区は平坦な面を呈し、C-2区から東側にかけて低く傾斜していく。D-2区で南側にさらに低く傾斜し、E-2区で最も低くなっている。E-2区から東に向けて再び高く傾斜し、G-1・2区はすでにⅣ層以下ⅩⅧ層まで残存しない。G-1・2区は上層にⅢ層が残存することから、古道が形成される頃には、削平されていたと考えられる。

G-2東部から急激に低く傾斜し、H-1・2の西部分で最も低くなる。この最も低い部分から東側にかけて急激に高く傾斜する。ただし、H-1・2区とI-1・2区の境目付近は、近世以降に削平されている。

このように現代の地形は、調査区全体が平坦な地形であったにもかかわらず、細かな谷が入りこむ凸凹の多い地形であったと考えられる。なおC-2区の一部をⅩⅧ層上面まで掘り下げてみたところ、ⅩⅠ上面ではより一層急勾配で東側に低く傾斜していることが分かった。

#### 【参考文献】

- 大崎町教育委員会(1989)『神領地下式横穴群5号』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 大崎町教育委員会(1992)『神領地下式横穴6号』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
- 大崎町教育委員会(2001)『立山B遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
- 大崎町教育委員会(2004)『金丸城跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- 大崎町教育委員会(2004)『下堀遺跡・大崎細山田段遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
- 大崎町教育委員会(1988)『中世の城跡』文化財研究誌第6集 救仁郷断二(1951)『大崎町史』
- 中村耕治他(1987)『大隅地方の古墳調査-墳丘測量を中心として-曾於郡大崎町、横瀬古墳』鹿児島考古第23号
- 池畑耕一『南九州における横瀬古墳の特殊性』黎明館調査研究報告第1集



第4図 美堂A遺跡古墳時代遺構検出面地形図及び土層堆積図(①~③)

第1表 美堂A遺跡・小園遺跡及び周辺遺跡の地名表

遺跡名	所在地	地 形	時 代	遺物等	備 考
栗之峰	横瀬栗之峰	火山灰台地	弥(中)	弥生土器 甕棺破片	
神領遺跡群	神領・横瀬竜相	火山灰台地			
天子ノ前	横瀬竜相		弥(中・後)	弥生土器片 甕棺破片	
天子丘	横瀬天子丘		弥(中・後)	弥生土器片	
竜相	横瀬竜相		弥(中・後)	弥生土器片	
天子の前土坑	横瀬天子の前		古墳	仿製鏡 貝輪 直刃 人骨 軽石組合せ石棺(舟形)	S34年盗掘される
神領古墳群1号	神領27		古墳		長径12.0m 高2.3m 所有者上南嘉吉
神領古墳群2号	神領34		古墳		長径12.0m 高2.3m
神領古墳群3号	神領40		古墳		長径12.0m 高2.3m 頂上に氏神祠あり
神領古墳群4号	神領		古墳		長径12.0m 高1.1m 1/8破壊
神領古墳群5号	神領		古墳		長径9.0m 高1.0m 1/8破壊
神領古墳群6号 (天子岡古墳)	神領		古墳	花崗岩質板石6枚の組合せ石棺 鉄剣 鉄刀 鏡	前方部幅16.0m 後円部径19.0m 長径43.0m 高2.0m~3.0m 消失
神領古墳群7号	神領		古墳		小丘上にあり 中学校所有地
神領古墳群8号	神領		古墳	石棺 軽石散在 弥生式土器	長径10.0m 高1.0m方形化
神領古墳群9号	横瀬竜相		古墳		長径5.0m 高1.0m
神領古墳群10号	横瀬竜相		古墳		後円部径14.0m 前方部5.0m 高4.0m 長さ26.0m S24・5発掘 半壊
神領古墳群11号	横瀬竜相		古墳		国鉄線上縦に半壊 わずかに残る
神領古墳群12号	横瀬竜相		古墳		方形化 わずかに残る
神領古墳群13号	横瀬竜相		古墳		方形化 長径5.0m 高1.2m
神領古墳群14号 天子岡土14号	横瀬竜相		古墳	地下内に軽石組合せ 石棺身形出土品なし	長径12.0m 高1.4m
神領地下式横穴 墓群1号	神領		古墳	鉄剣1 骨製筭1 イモガイ貝釧2 内向花文鏡1 S35調査	S58大隅地区埋蔵文化財分布調査概報(鹿児島 県埋蔵文化財発掘調査報告書29)
神領地下式横穴 墓群2号	神領		古墳		S58大隅地区埋蔵文化財分布調査概報(鹿児島 県埋蔵文化財発掘調査報告書29)
神領地下式横穴 墓群3号	神領		古墳	全長1.45m 玄室幅約0.35~0.5m 長約1.25m 高約0.4m S55調査	S58大隅地区埋蔵文化財分布調査概報(鹿児島 県埋蔵文化財発掘調査報告書29)
神領地下式横穴 墓群4号	神領		古墳	全長2.3m 玄室幅約0.55~0.85m 長約1.8m 推定高約0.6m	S58大隅地区埋蔵文化財分布調査概報(鹿児島 県埋蔵文化財発掘調査報告書(29))
神領地下式横穴 墓群5号	横瀬竜相		古墳	イモガイ貝釧 1987.11.30調査	大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
神領地下式横穴 墓群6号	横瀬竜相		古墳	人骨 1990.11月調査	大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
神領地下式横穴 墓群7号	神領	火山灰台地	古墳		
神領地下式横穴 墓群8号	神領	火山灰台地	古墳	2006.10月調査	
八島ヶ迫	神領八島ヶ迫		弥生	弥生土器 土師器 須恵器	S58大隅地区埋蔵文化財分布調査概報(鹿児島 県埋蔵文化財発掘調査報告書29)
下原	神領下原		弥生	弥生土器 土師器 須恵器	S58大隅地区埋蔵文化財分布調査概報(鹿児島 県埋蔵文化財発掘調査報告書31)
飛別府	神領飛別府		弥生	弥生土器 土師器 須恵器	S58大隅地区埋蔵文化財分布調査概報(鹿児島 県埋蔵文化財発掘調査報告書33)
道上	神領道上		弥生	弥生土器 土師器 須恵器	S58大隅地区埋蔵文化財分布調査概報(鹿児島 県埋蔵文化財発掘調査報告書35)
竜相城跡	横瀬157		平安		平安時代末期(1190年)肝付氏築城 文明
野卸城跡	永吉3267-2	火山灰台地	平安		平安時代末築城(1190年)
楯谷城跡	永吉2528	火山灰台地	鎌倉		鎌倉時代に大隅の守護職名越氏の代官肥後氏 が築城者ではないかといわれている
胡摩ヶ崎城跡	仮宿776-1	火山灰台地	室町	掘割4ヶ所	本丸の跡 南北朝時代 楡井氏の城
大崎城跡	仮宿922	火山灰台地	室町	掘割3ヶ所	
横瀬古墳	横瀬エザイ町 1427・1428	海岸平野	古墳	前方後円墳全長136m 円筒・形象埴輪 周濠あり	S18.9.8に国指定重要文化財
鷲塚地下式横穴 墓群	永吉8894-3	火山灰台地	古墳	地下式横穴長2.14m 幅1.1m 高0.64m軽石礫 人骨 刀子	S59.2.25に町指定文化財
大塚	横瀬	火山灰台地	弥・歴史		H7農政分布調査
美堂A	仮宿	火山灰台地	古墳		H7農政分布調査
美堂B	仮宿	火山灰台地	古墳		H7農政分布調査
小園	仮宿	火山灰台地	古墳		H7農政分布調査
浜田	横瀬浜田	火山灰台地	古墳	成川式土器	H9農政分布調査
堂地迫	永吉堂地迫	火山灰台地	古墳・中世	成川式土器 須恵・青磁	H9農政分布調査
桜迫	永吉桜迫	火山灰台地	縄・弥・古墳	土器片 成川式土器	H9農政分布調査
外園	永吉	火山灰台地	弥・古墳	土器	H11農政分布調査

### 第三章 調査の概要

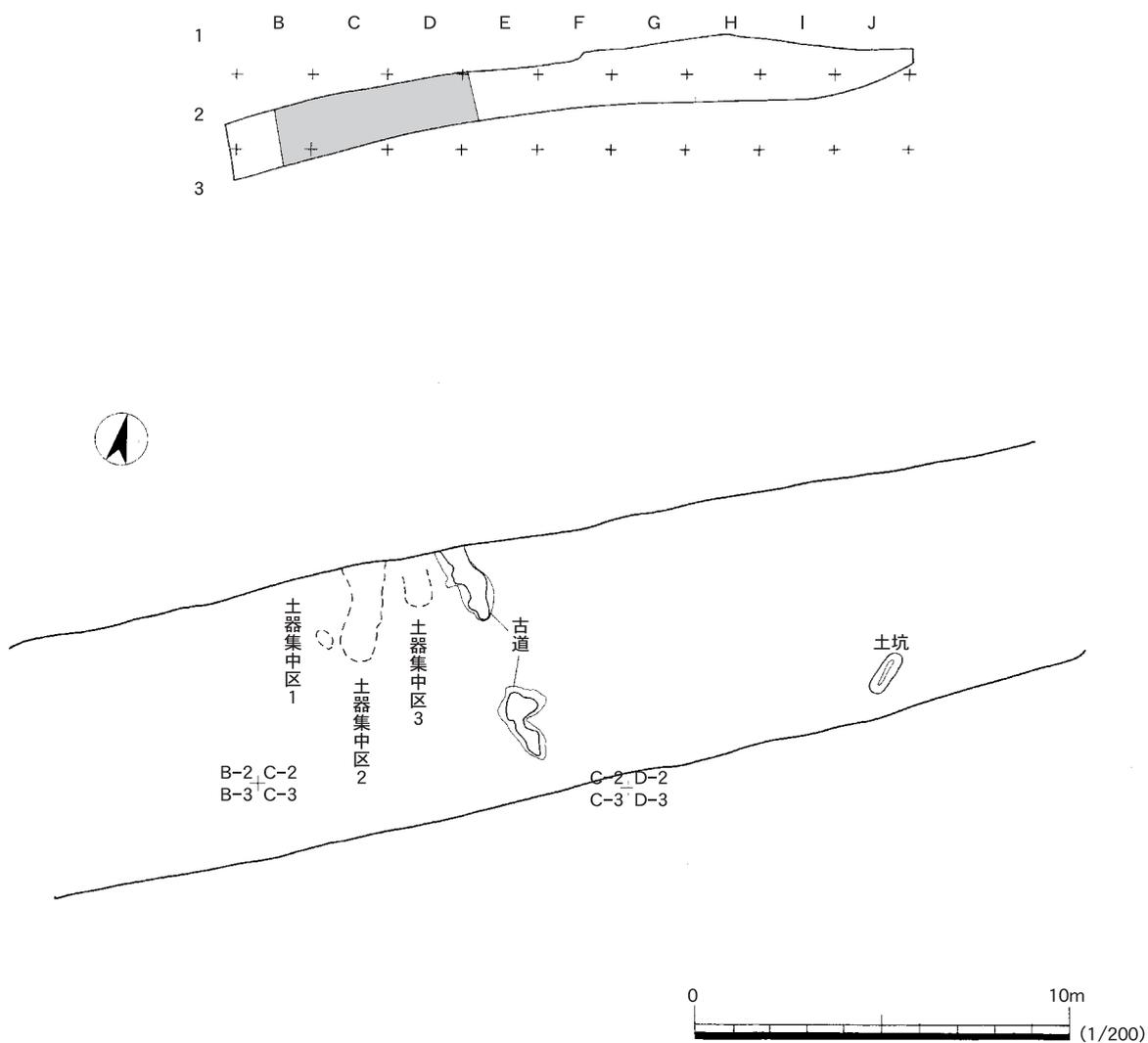
#### 第1節 古墳時代の概要

##### 1. 検出した遺構と遺物の出土状況

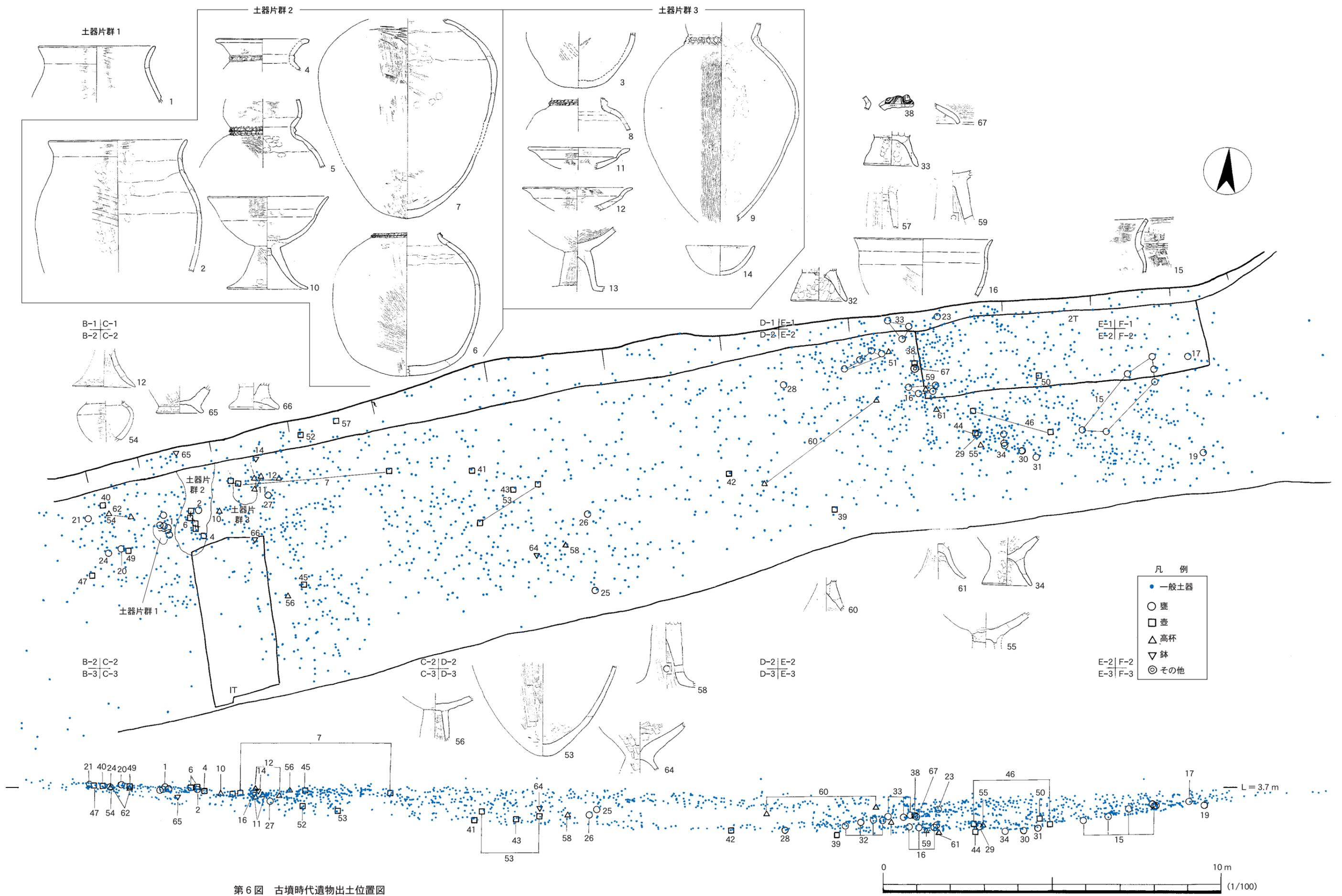
古墳時代の遺構配置図は第5図のとおりである。C-2区Ⅶ層中で古道と思われる帯状の硬化面が検出された。また、D-2区では、Ⅷ層上面で楕円形の土坑を検出した。しかし、これ以外の遺構は確認されず、特にC-2区における小片の集合体（土器片群）が確認されている箇所については、遺構の可能性を考えたが、プランが確認されなかった。

古墳時代の遺物はⅢ～Ⅵ層に出土し、その遺物分布状況については第6図のとおりである。グリッドD-2区は、周囲と比べて低い地形であり、黒色土層が厚く堆積していた。この区間については黒色土層がさらに細かく分層される。この区間のⅣ～Ⅵ層で古墳時代の遺物が集中して出土する。また、B-2・3区はほとんど遺物が出土しなかった。

遺物は、C-2区及びE-2区に多く出土する傾向がある。



第5図 古墳時代の遺構配置図



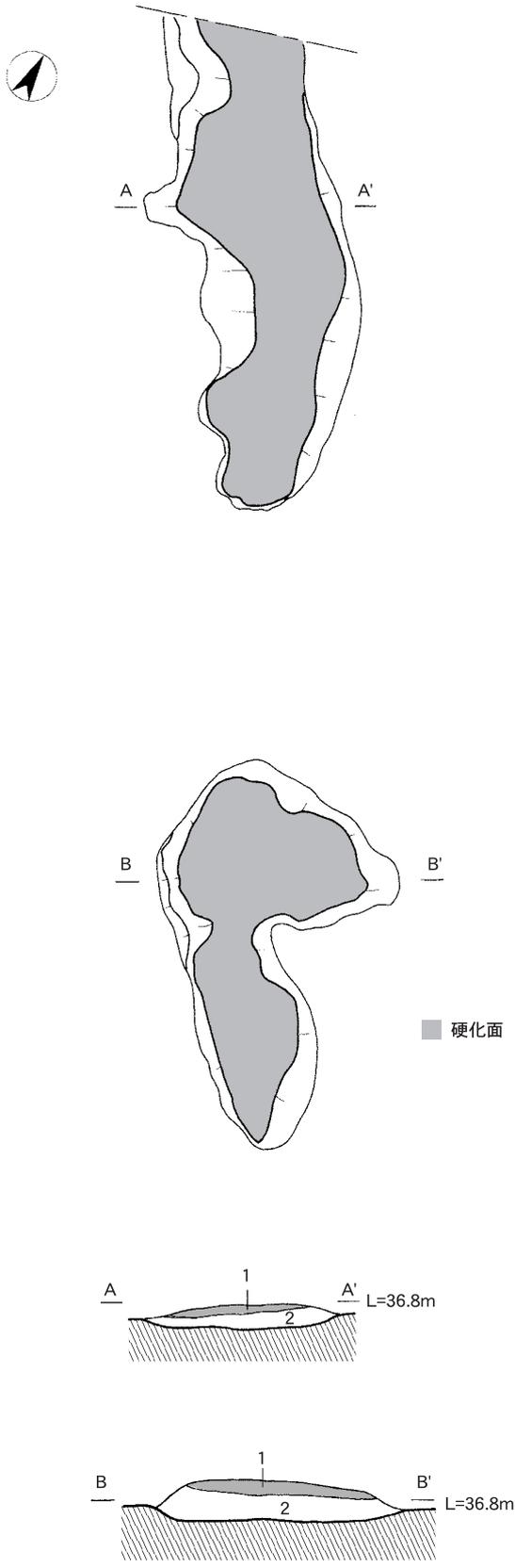
第6図 古墳時代遺物出土位置図

## 2. 遺構と遺物の概要

### ①古道（第7図）

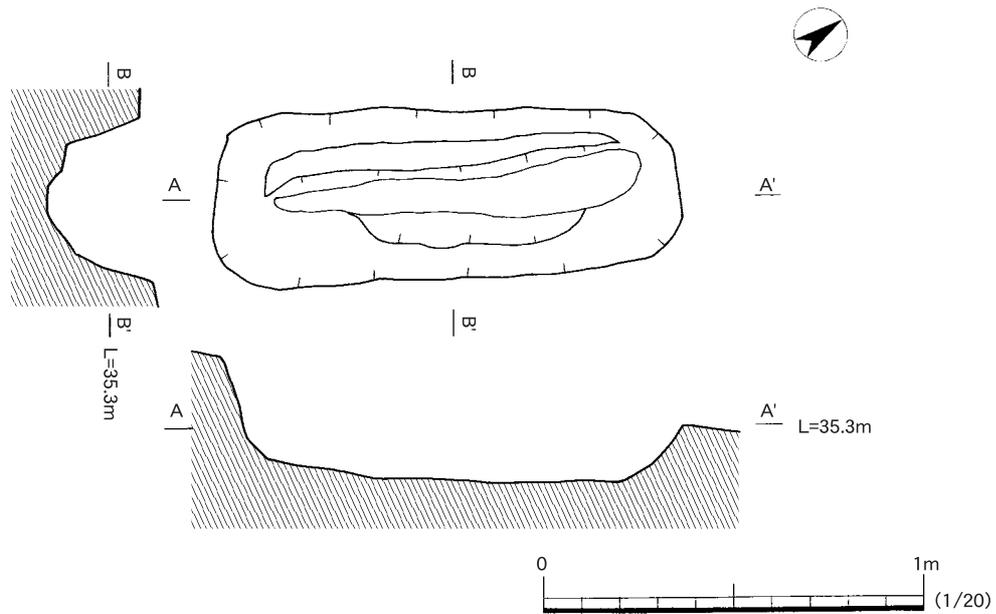
C-2区Ⅶ層中で検出した。灰色や灰褐色を多く含む黒色土の硬化面が帯状に形成されていた。ただし、一部硬化面が1.4m程寸断される箇所がある。後に別の遺構によって切られている可能性もあるが、最終的なⅩⅢ層上面の検出では、この箇所に遺構プランは確認されなかった。

硬化面を形成する灰色や灰褐色を多く含む黒色土の層は厚さ約5cmであり、硬化している。また、下層はしまりのある黒色土が堆積しており、この層を除去すると、やや凹みが確認された。



- 1 灰色や灰褐色の土を含む黒色土。硬化している。
- 2 黒色土。しぼりがある。

第7図 古道実測図



第8図 土坑実測図

### ②土坑（第8図）

D-2区Ⅷ層上層で検出した。この遺構は斜面で立地しており、平面形は北東-南西に長い楕円形で長軸1.22m、短軸0.45mであり、深さは0.2～0.25mを測る。埋土は黒色軟質土で、遺物の出土は無かった。

### ③土器片群

C-2区で土器の小片が集中して出土する箇所を検出した。この集中箇所をさらにまとまりのあるグループを3つに分け（土器片群1～3）、取り上げを行った。土器片群2・3は、可能な限りまとまりを細分し、取り上げを行ったが、整理作業の段階で複数固体の土器が混在していたことが判明した。

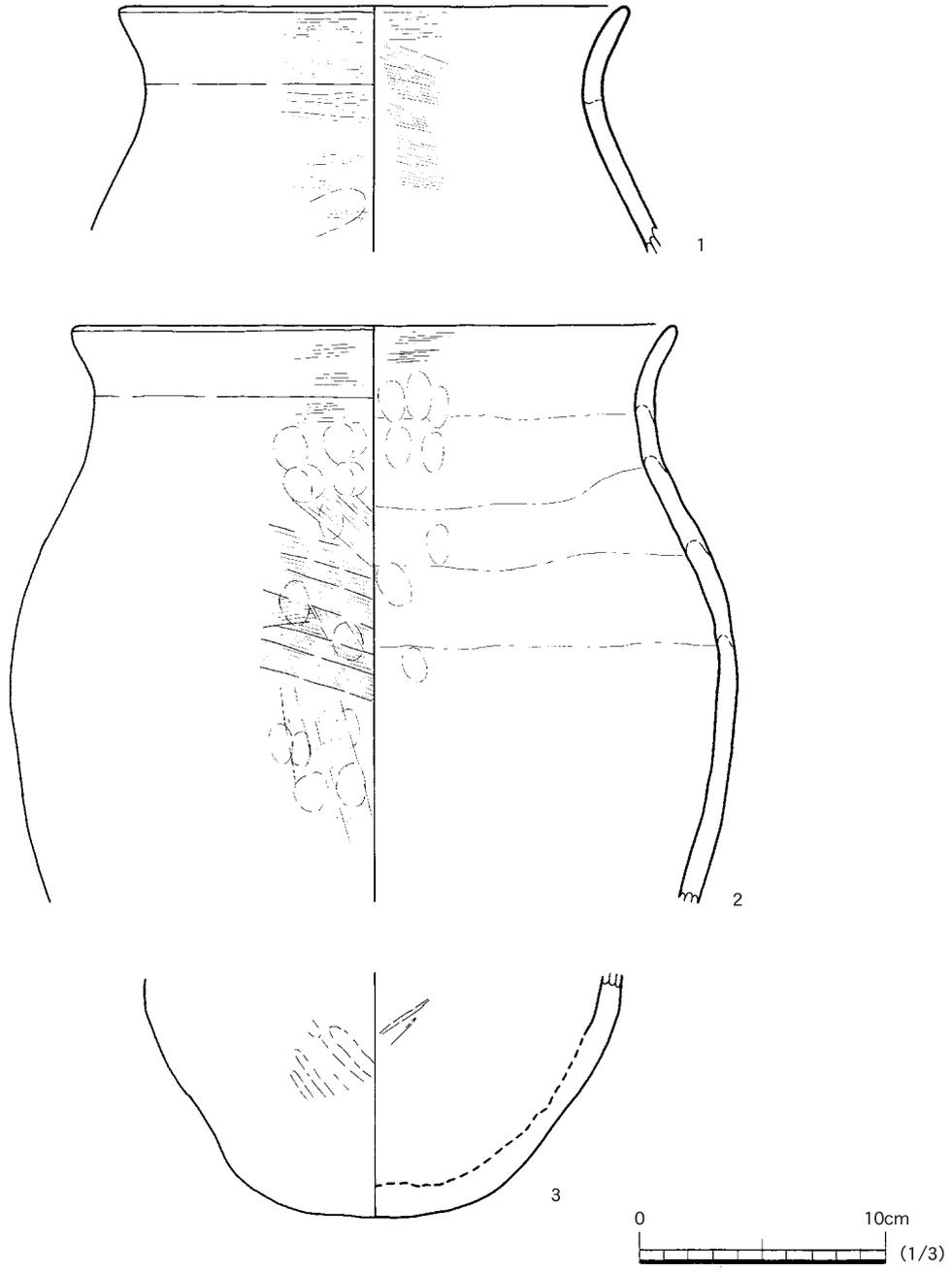
この部分については、何らかの遺構が存在する可能性を考えたが、Ⅷ層上面では遺構プランが検出されなかった。しかし、この土器片群は調査区外に延びており、調査区外に何らかの遺構が存在する可能性も考えられる。

### 甕（第9図 1～3）

1は土器片群1、2は土器片群2、3は土器片群3で出土したものである。

1・2は突帯をもたない甕である。1は口縁部から屈曲部で、2は口縁部から胴部までが残存する。いずれも胴部から内湾しながら屈曲部で緩やかに外反する。1は内外ともに刷毛状工具でナデ調整がされている。2の内面はナデ調整がされているが、粘土の接統面がわずかに残る。外面は胴部がヘラ状工具で調整され、煤が付着する。屈曲部は内外とも著しく指で押さえた痕跡を残す。

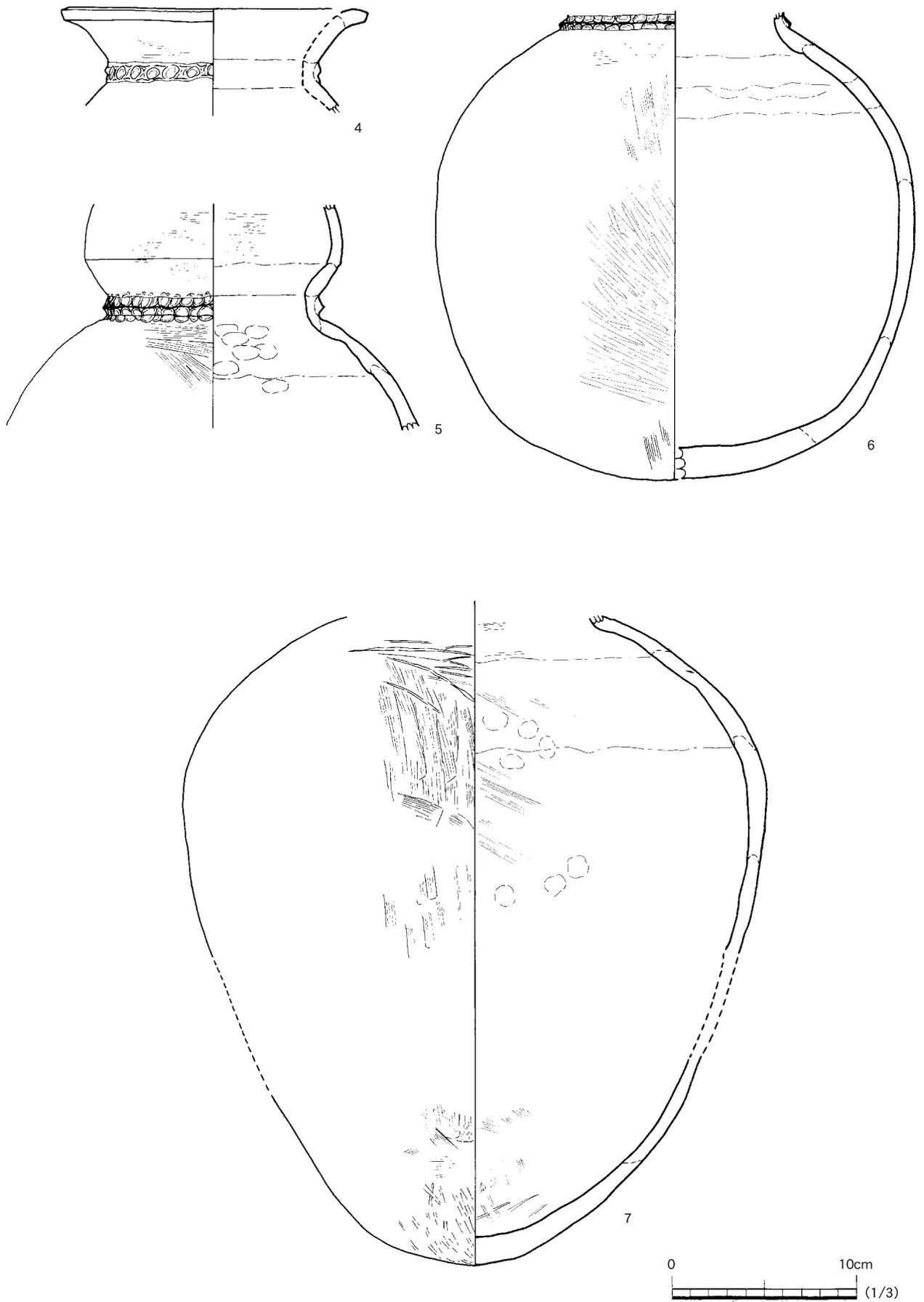
3は甕の底部である。当初壺の底部と思われたが、外面に煤の付着があったため、丸底の甕と判断した。



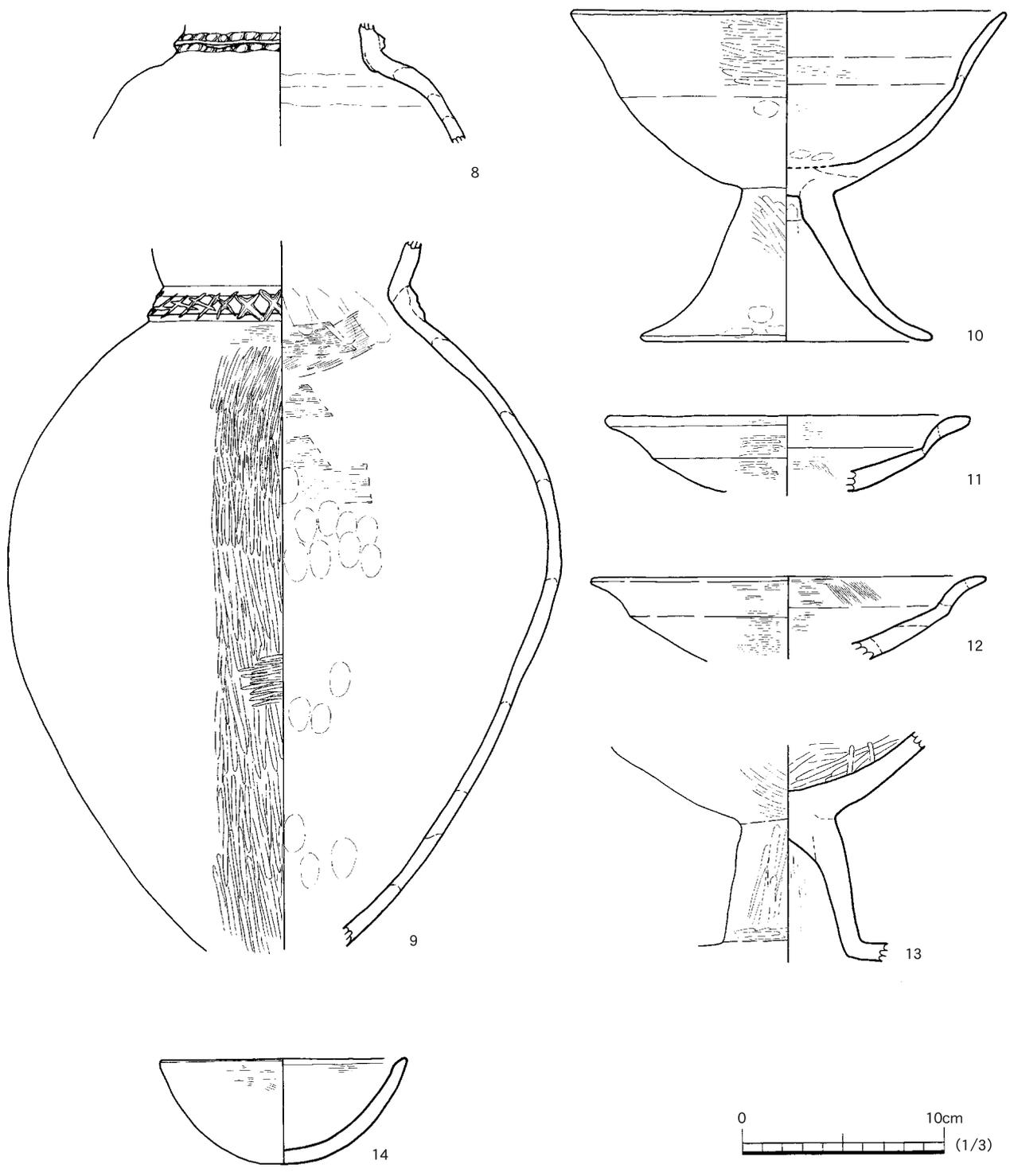
第9図 土器集中区出土遺物(1)

第2表 土器片群出土遺物観察表(1) ※(縦)・(横)・(斜)…調整の方向

挿部番号	レイアウト番号	出土位置 (取上げ番号)	器種	器種 部位	器 部			色 調		調整痕		胎 土					焼 成	備 考		
					法 量 (cm)			外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石			その他	
					口径	底径	器高													
9	1	土器片群1, C区IV層 No.1635 No.1654 No.1658 No.1659 No.1661	甕	口縁 ~胴	20.2			橙	橙	刷毛状工具 ナデ(横)	刷毛状工具 ナデ(横)	○	△					褐色石	良好	
9	2	土器片群2-6・7・9, C区IV層No.1612, C 区一括	甕	口縁 ~胴	24.2			橙	橙	ヘラ状工具 ナデ(縦・ 斜)・指頭圧 痕・横ナデ	指頭圧痕・ 指ナデ	△	△				褐色石 灰色白	"	外面に煤付着。	
9	3	土器片群3-4, C区 一括	甕	底		5.0		にぶい 褐	にぶい 褐	一部ミカキ 残す	工具痕残す	○	○	○			褐色石 灰色白	"	外面に煤付着。	



第10図 土器集中区出土遺物(2)



第11图 土器集中区出土遗物(3)

壺 (第10・11図 4～9)

4～7はいずれも土器片群2から出土したものである。ただし、7の底部は土器片群3から出土した部分も含まれる。

4は口縁部から肩部である。頸部から口縁部にかけて外反し、口縁端部でさらに外側に開く。口唇部は丁寧に調整され、面が施されている。頸部の付け根に断面略台形の突帯を貼り付け、工具先端で刺突した左下がりの深い刻みを施す。外面は横方向のナデ調整がされている。内面は剥落している。

5は二重口縁壺の肩部から頸部である。頸部から外反し、再び内弯しながら口縁部へと立ち上がる。頸部の付け根に断面三角形の突帯を貼り付け、突帯上下に指頭圧痕が連続的に施される。肩部外面は斜め方向及び横方向にヘラ状工具でナデ調整しており、頸部から口縁部にかけては内外とも横方向にナデ調整がなされる。

6・7は肩部から底部である。6の胴部はほぼ球形を呈する。6は頸部が残存しており、断面三角形の突帯を貼り付け、突帯上下に指頭圧痕が連続的に施される。5は突帯からはみ出した指頭圧痕を残していたが、6の場合は丁寧にナデ消している。肩部外面はヘラ状工具による縦方向のナデ及び横方向のナデ調整がされており、胴部外面は斜め方向のミガキが施される。内面はナデ調整がされているが、肩部内面は粘土の継ぎ目が鮮明に残る。

7は肩部から胴部と底部の二つの部位に分かれるが、出土位置、胎土から同一個体と考えてよいと思われる。胴部の形状は倒卵形である。胴部外面はハケ目調整を行った後ナデており、肩部外面はハケ目調整の上から斜め・横方向にミガキ調整を施す。内面は指押さえ、工具状ナデの痕跡を残す。底部外面

はミガキがされている。内面は工具状ナデが施され、工具が強く押し当たった痕跡もある。

8・9は土器片群3から出土したものである。8は肩部である。頸部の付け根に断面三角形の突帯を貼り付け、突帯上下に指頭圧痕か、工具による圧痕が連続的に施される。内外面はナデ調整がされている。

9は頸部から胴部である。胴部は倒卵形である。頸部付け根は断面略台形の突帯を貼り付け、工具で右上がり斜めの刺突を施した後、左上がり斜めの刺突を重ねている。胴部外面は縦方向のミガキが施される。胴部・頸部内面は指押さえのちナデ調整、肩部内面は工具による横方向ナデ調整が施される。

高杯 (第11図 10～13)

10～12は土器片群2で出土したものである。いずれも杯部は口縁部にかけて外反する。10の脚部は八の字形である。10は口縁部と脚部にミガキの痕跡を残す。

13は土器片群3で出土した脚部である。脚部は筒状を呈し、脚端部でL字型に外開きする。脚部はミガキが施される。杯部の内面には、幅5mm程の工具痕が縦横に残る。

鉢 (第11図 14)

14は土器片群3で出土した。底部は丸く、口縁端部は内面側がやや外傾する碗形を呈する。全体的に丁寧なナデ調整がされている。

④包含層出土遺物

甕 (第12図 15～34)

15～19は口縁部である。15は屈曲部分に断面三角形の突帯を貼り付け、縦方向に工具による刻みを施す。外面は突帯から下部は下方向へ、上部は上方向へ丁寧なハケ目調整が施される。内面は胴部

第3表 土器片群出土遺物観察表(2) ※(縦)・(横)・(斜)…調整の方向 (U)・(V)・・・工具による刻目の断面形

挿 図 番 号	レ イ ア ウ ト 書	出土位置 (取上げ番号)	器種	器 部			色 調		調整痕		胎 土					焼 成	備 考	
				部 位	器 部		外面	内面	外面	内面	石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	輝 石			其 他
					口径	底径												
10	4	土器片群2-6, C区IV層No.1623	壺	口縁	16.6		にぶい 赤褐	にぶい 褐	ナデ(横)・工 具刻目(U)	剥落		◎			○	灰色石	"	
10	5	土器片群2-8, C区一括	壺	頸～ 肩			にぶい 赤褐	にぶい 赤褐	ヘラ状工具 ナデ(横・斜)・ ナデ(横)・指 頭圧刻目	指頭圧痕・ ナデ(横)		◎		△		白色石	"	
10	6	土器片群2-3・5・6, C区IV層 No.1615 No.1616 No.1619 No.1642	壺	肩～ 底	11.0		にぶい 橙	にぶい 橙	ミガキ(斜)・ ナデ(横)・ヘ ラ状工具ナ デ(縦)・指頭 圧刻目	ナデ・剥落			△	△	△	褐色石	"	
10	7	土器片群2-1・3・4・8 3-1・2, C区IV層 No.334 No.1581 No.1583	壺	肩・ 底	6.0		にぶい 橙	にぶい 橙	ハケ目後ナ デ消し・ミガ キ(横・斜)	工具ナデ (斜)			△	△		褐色石	"	
11	8	土器片群3-4	壺	肩			にぶい 褐	にぶい 褐	ナデ・指頭圧 刻目	ナデ	○		△			褐色石	"	
11	9	土器片群3-3・4	壺	頸～ 胴			橙	橙	ミガキ(縦)・ 指頭圧痕後ナ デ・工具ナデ(横)	指頭圧痕後ナ デ・工具ナデ(横)			△		◎	"	"	

※(縦)・(横)・(斜)…調整の方向 (U)・(V)・・・工具による刻目の断面形

挿 入 番 号	出土位置 (取上げ番号)	器種	器種 部位	器 部			色 調		調整痕		胎 土					焼 成	備 考	
				法量 (cm)			外面	内面	外面	内面	石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	輝 石			そ の 他
				口径	底径	器高												
11 10	土器片群 2-4・7 C区IV層 No.1603	高杯	口縁 ～脚	21.6	14.4	16.4	にぶい 橙	にぶい 橙	ミガキ(横・ 斜)・指頭圧 痕	ナデ			◎			○	〃	
11 11	土器片群 3-2・3, C区IV層 No.1567 No.1575	高杯	口縁 ～胴	18.2			橙	橙	刷毛状工具 ナデ(横)	刷毛状工具 ナデ(横)	○	◎	◎			褐色石	〃	
11 12	土器片群 3-1・2・3, C区IV層 No.1562 No.1571	高杯	口縁 ～胴	19.6			にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	ミガキ一部 残る	刷毛状工具 ナデ(横)	◎	○	○			灰色白	〃	
11 13	土器片群 3-2・3, C区一括	高杯	杯 ～脚				にぶい 橙	にぶい 橙	ミガキ(縦・ 横)・工具ナ デ	工具ナデ	◎	○	○			赤褐色 石	〃	
11 14	土器片群 3-2・3・4, C区IV層 No.1566	鉢	口縁 ～底	11.8	—	5.3			刷毛状工具 ナデ(横)	刷毛状工具 ナデ(横)		○	△			褐色石	〃	

に縦方向、くびれ部分から上は横方向のハケ目調整が施される。16は屈曲部分から緩やかに外反し、口縁部へと立ち上がる。胴部外面は斜め方向の工具ナデ調整、内面はナデ調整である。

20～31は屈曲部分であり、20・21は斜めの布目刻みが施される。22・25・28は断面台形の突帯を、23・24・26・27・29～31は断面三角形の突帯を施す。22～28は工具圧痕による刻みが施されるが、29～31は刻目が施されない。

32～34は甕の脚部である。32・33は直線的に立ち上がり、34は外反して立ち上がる。いずれも指頭圧痕が内外面に顕著に残る。34の甕部の内面底は煤が付着する。

#### 壺(第13図 35～53)

35～37は口縁部である。35は頸部から大きく外反して、口縁端部で内側に屈曲し、垂直に立ち上がる。内外面とも横方向のナデ調整がされている。内面は大部分摩滅している。37は口唇部に縦の刻目を施す。38は口縁部外面に櫛描波状文を施す二重口縁壺である。安国寺式土器である。

39・40は頸部である。39は断面三角形の突帯を貼り付け、先端の鋭い工具で刻みを施す。40は布目刻みが施される。41～52は胴部である。41・43・45～49は断面三角形の突帯を貼り付け、46・47は2条の突帯が設けられる。42・44・50～52は断面略台形の突帯を貼り付ける。50～52は突帯をナデ調整によって台形化させている。50は突帯下には横ナデによって凹線が形成される。41・42・46は先端の鋭い工具で刻みを施す。43は布目刻みが見られる。51・52は工具による縦の刻みを施す。47～50には刻みが施されない。

42と50は外面に縦方向のハケ目調整痕が確認される。また、43の内面にも横方向のハケ目調整痕が見られる。51・52の内外面はハケ目調整のちナデによる仕上げを行なっている。53は底部である。

外面に煤が付着している。外面は底部から胴部にかけて上方向にハケ目調整痕が確認される。

#### 埴(第13図 54)

54は埴の胴部である。外面は横方向にナデ調整がされている。

#### 高杯(第14図 55～62)

55は杯部である。脚部が外れた部分は指押さえによる調整がされている。鉢の可能性もある。56～62は脚部である。

56～59は筒状を呈する。56～58の外面はミガキが施されている。しかし56・58は表面がやや磨耗しているためか、光沢は無い。59もわずかにミガキらしきの痕跡が観察できるが、明瞭ではない。58・59は脚部内面が中心部に向けてすばまっており、円孔の透かしがみられる。

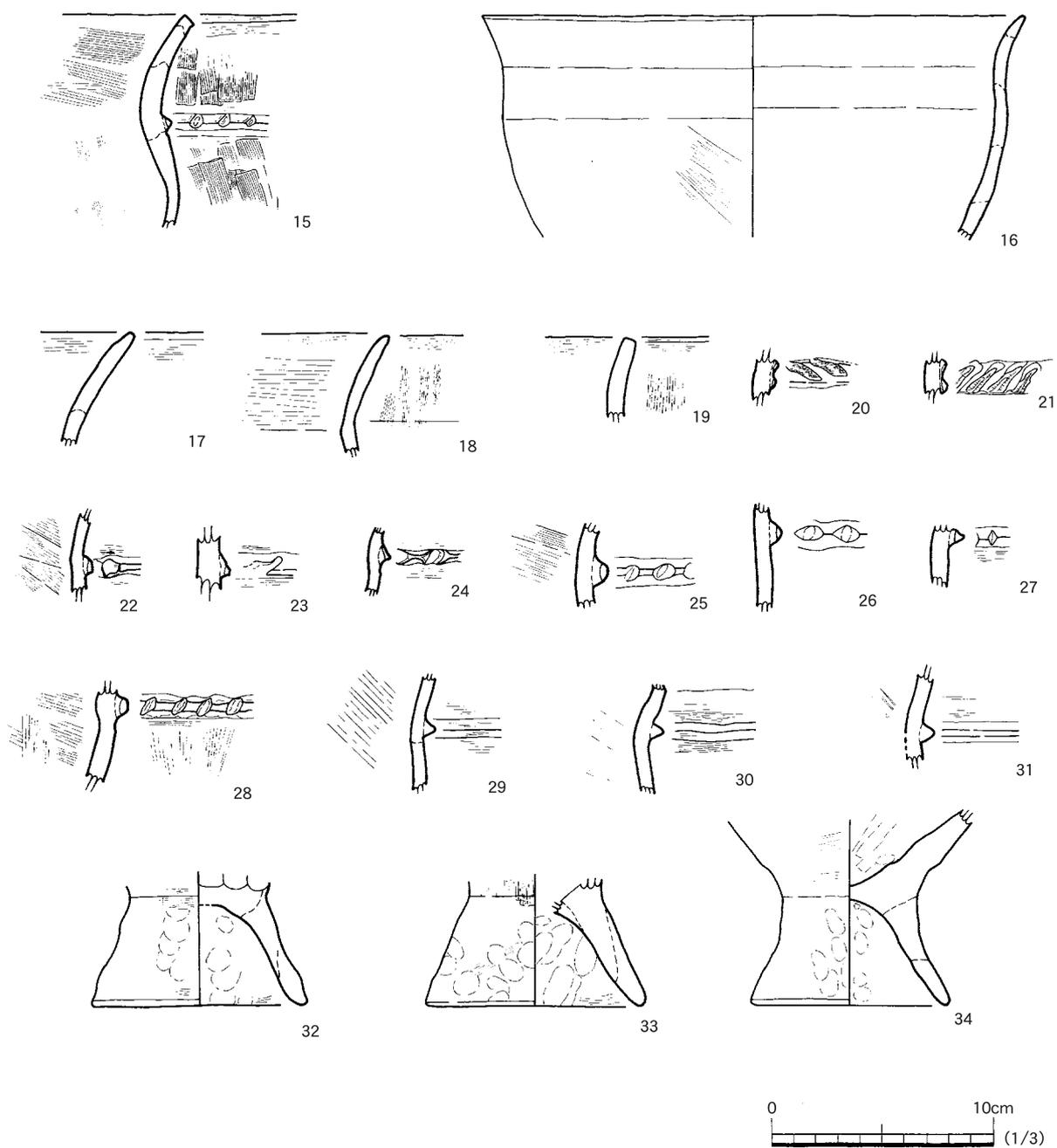
60～62の脚部は八の字形である。60・61は上方向のケズリ調整のちナデ調整されている。62の脚端部の内外面にはミガキが確認される。

#### 鉢(第14図 63～66)

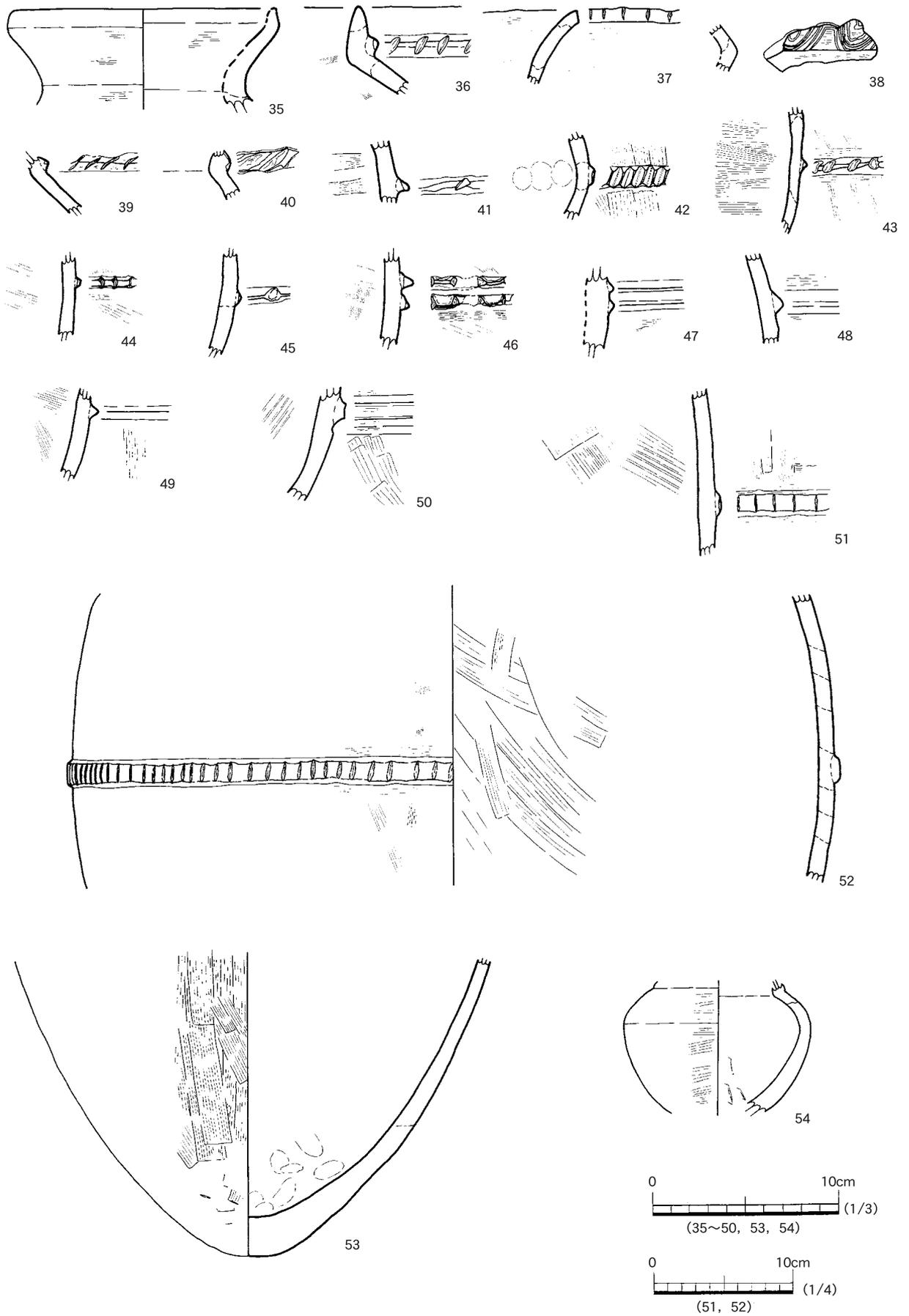
63は椀形を呈すると思われる。内外面とも指頭圧痕が顕著であり、粗い成形である。64は脚台を持つ鉢の胴部から脚部である。鉢の底中心部は深く凹む。外面は上方向のハケ目調整痕が明瞭に残る。鉢の内面も横方向のハケ目調整痕が一部見られるが、全体的にナデによって消されている。65・66は脚部である。いずれも脚端部は外側に開く短い脚である。65は底部外面天井部に指頭圧痕が見られる。胴部外面は上方向のハケ目調整を施す。66は脚部から胴部への立ち上がりが64・65と比べ、緩やかである。

#### その他(第14図 67)

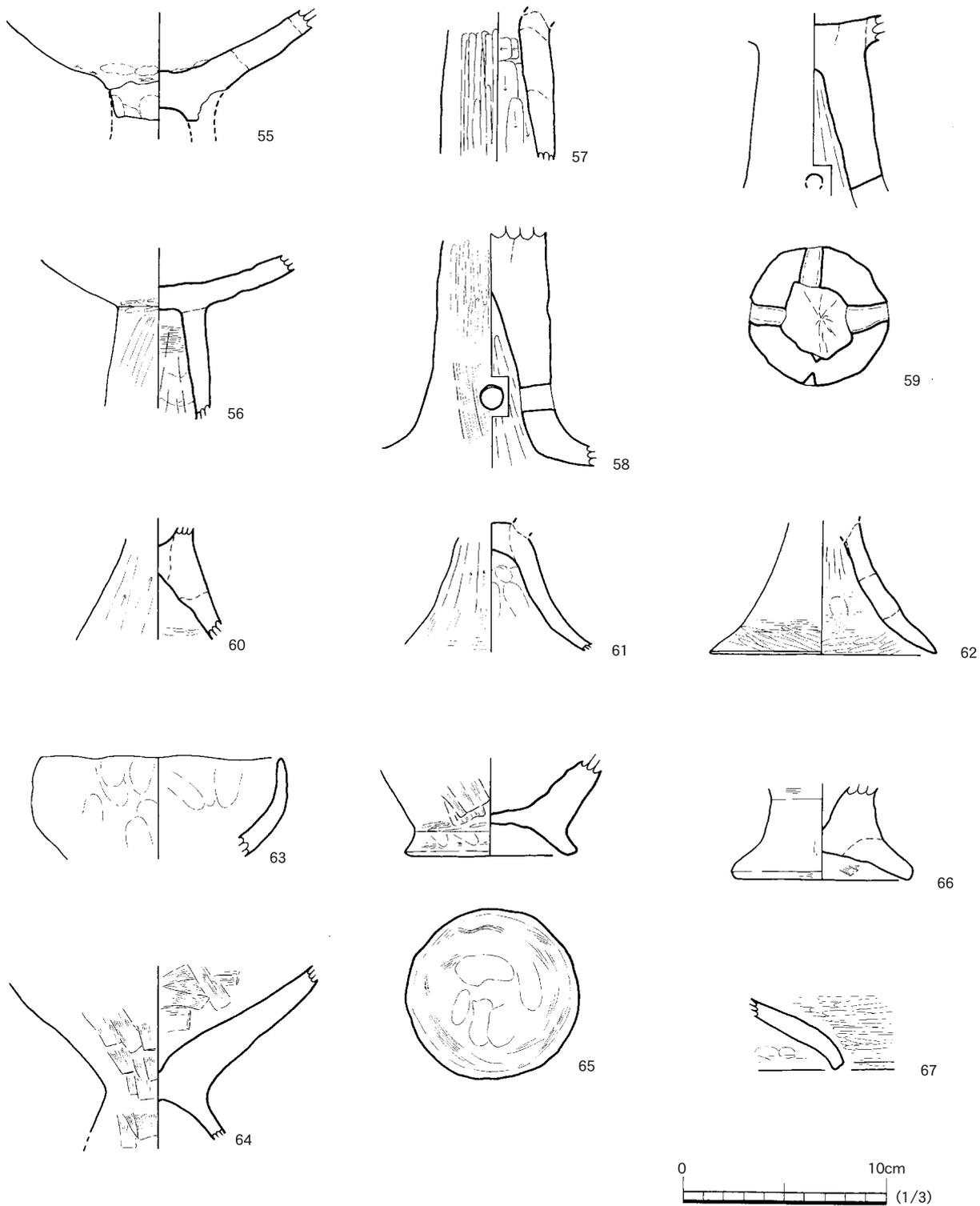
67は小片であるため、器種の特定は困難である。外面は丁寧なミガキが施される。高杯の脚端部か、蓋の口縁部と考えられる。



第12圖 古墳時代包含層出土遺物(1)



第13圖 古墳時代包含層出土遺物(2)



第14図 古墳時代包含層出土遺物(3)

第4表 古墳時代包含層出土遺物観察表 ※(縦)・(横)・(斜)・・・調整の方向 (U)・(V)・・・工具による刻目の断面形

挿入 番号	出土位置 (取上げ番号)	器種	器種 部位	器 部			色 調		調整痕		胎 土					焼 成	備 考	
				法 量 (cm)			外面	内面	外面	内面	石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	輝 石			そ の 他
				口径	底径	器高												
12 15	2 T II層 No.198, B 区Vb層 No.846 No. 855 No.857, C区V層 No.1145 No.1164	甕	口縁 ~胴				にぶい 橙	にぶい 橙	ハケ目(縦)	ハケ目(縦・ 横)	○	○		△	白色石	"		
12 16	C区V層 No.1029 No.1030 No.1031, VI層 No.979 No.982	甕	口縁 ~胴	24.6			にぶい 橙	にぶい 褐	刷毛状工具 ナデ(斜・横)	ナデ		△	△		褐色石 灰色白	"		
12 17	2 T II層 No.89	甕	口縁				にぶい 橙	にぶい 橙	刷毛状工具 ナデ(横)	刷毛状工具 ナデ(横)	△	○	○		褐色石	"		
12 18	B区 中世古道埋土	甕	口縁				にぶい 黄橙	にぶい 褐	刷毛状工具 ナデ(縦・横)	刷毛状工具 ナデ(横)	△	△	△		褐色石	"		
12 19	B区V層 No.1231	甕	口縁				にぶい 黄橙	にぶい 橙	刷毛状工具 ナデ(縦・横)	刷毛状工具 ナデ(横)	○				褐色石 灰色白	"	外面に煤付着。	
12 20	C区IV層 No.1685	甕	口縁				にぶい 橙	にぶい 橙	布目刻目(U)	ナデ		△	△		褐色石 灰色白	"		
12 21	C区IV層 No.1709	甕	胴				にぶい 橙	にぶい 橙	布目刻目(V)	ナデ		△	△		褐色石	"		
12 22	C区 一括	甕	胴				黒褐	にぶい 橙	工 具 刻 目 (U)・ナデ	刷毛状工具 ナデ(横・斜)	○	○	△			"		
12 23	2 T II層 No.146	甕	胴				にぶい 橙	にぶい 橙	工 具 刻 目 (V)・ナデ	ナデ	○	○			褐色石 灰色白	"		
12 24	C区IV層 No.1686	甕	胴				にぶい 赤褐	にぶい 赤褐	工 具 刻 目 (V)・ナデ	ナデ	○	○	○			"		
12 25	C区V層 No.671	甕	胴				にぶい 黄橙	にぶい 橙	刻目(U・磨 耗)	刷毛状工具 ナデ(横)		○	△		褐色石 灰色白	"		
12 26	C区Vb層 No.669	甕	胴				にぶい 黄橙	にぶい 橙	刻目(U・磨 耗)	ナデ		○			灰色石 ほか多	"		
12 27	C区VIII層 No.1952	甕	胴				にぶい 黄橙	灰黄褐	工具刻目(V) 刷毛状工具 ナデ(横)	ナデ	△	△			褐色石 灰色白	"		
12 28	C区VI層 No.894	甕	胴				黒褐	にぶい 橙	工 具 刻 目 (V)・ハケ目 (縦)後ナデ	ハケ目(横) 後ナデ	△	○	○		褐色石 白色白	"		
12 29	C区V層 No.999	甕	胴				黄灰	にぶい 黄橙	断面三角突 帯・刷毛状工 具ナデ(横)	ハケ目(斜) 後ナデ		○			褐色石 灰色白	"		
12 30	C区VI層 No.1396	甕	胴				にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	断面三角突 帯・刷毛状工 具ナデ(横)	ハケ目(斜) 後ナデ		○	△		褐色石 多灰色 白	"		
12 31	C区VI層 No.1402	甕	胴				にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	断面三角突 帯・刷毛状工 具ナデ(横)	ハケ目(斜) 後ナデ	○	○	△		褐色石 灰色白	"		
12 32	C区Vb層 No.752 No.754, VI層 No.920 No.1354	甕	底	9.6			にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	指頭圧痕・刷 毛状工具ナ デ(横・斜)	指頭圧痕・刷 毛状工具ナ デ(横)		○	○		灰白色 石	"		
12 33	C区Va層 No.991, Vb層 No.758 No.762 No.763	甕	底	9.8			橙	橙	指頭圧痕・刷 毛状工具ナ デ(横)	指頭圧痕・刷 毛状工具ナ デ(横)		△	△		褐色石 灰色白	"		
12 34	C区V層 No.1073, VI層 No.1385 No.1389 VIII層 No.1969	甕	底	9.0			にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	指頭圧痕・刷 毛状工具ナ デ(横)	指頭圧痕・ナ デ・工具ナ デ(横)		○			白色石 褐色石	"		
13 35	2 T II層 一括	壺	口縁	14.2			橙	橙	刷毛状工具 ナデ(横)	刷毛状工具 ナデ(横)・摩 滅	○	○			褐色 灰白色 石	"		
13 36	II層上 一括	壺	口縁				にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	工具刻目(V) 摩滅	ナデ・摩滅		◎	○			"		
12 37	団体宮 5 T II層 No.7	壺	口縁				にぶい 褐	にぶい 褐	刷毛状工具 ナデ(横)・ナ デ	刷毛状工具 ナデ(横)・ナ デ		○		△		"		
13 38	C区Vb層 No.772	壺	口縁				にぶい 橙	にぶい 橙	櫛描波状文	剥落		○	◎		白色石	"	安国寺式	
13 39	C区VI層 No.1365	壺	頸				にぶい 黄橙	にぶい 橙	工具刻目(V) ナデ	ナデ		△			褐色石	"		
13 40	C区IV層 No.1701	壺	頸				橙	橙	布目刻目・ナ デ	ナデ		○			白色石 灰色石	"		
13 41	C区VI層 No.1269	壺	胴				黒褐	にぶい 橙	工具刻目(V) ナデ	ナデ		△			褐色石 灰色白	"		
13 42	C区VI層 No.887	壺	胴				にぶい 橙	にぶい 黄褐	工具刻目(V) ハケ目(縦)	指頭圧痕・ナ デ	○	○		○		"		
13 43	C区V層 No.648	壺	胴				にぶい 黄橙	浅黄	布目刻目・ハ ケ目(縦)後 ナデ	ハケ目(横)	◎	◎			褐色石 多	"	他の土器より粒 子が大きく少し 白っぽい。	
13 44	C区VI層 No.1377	壺	胴				にぶい 黄橙	黒褐	工具刻目(V) 刷毛状工具 ナデ(縦)	ハケ目後ナ デ		○	△			"		
13 45	C区IV層 No.1508, 1 T II下層 一括	壺	胴				橙	にぶい 黄褐	工具刻目(U) 磨耗	磨耗	○	○	○			"		

第4表 古墳時代包含層出土遺物観察表 ※(縦)・(横)・(斜)・・・調整の方向 (U)・(V)・・・工具による刻目の断面形

挿入 図番号	層	出土位置 (取上げ番号)	器種	器種 部位	器部			色調		調整痕		胎土					焼成	備考	
					法量 (cm)			外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石			その他
					口径	底径	器高												
13 46	C区V層 No1106	No1049	壺	胴				にぶい 黄褐	にぶい 黄褐	工具刻目(V) ナデ	刷毛状工具 ナデ(横)	○					灰色石 褐色石	"	
13 47	C区IV層 No1725		壺	胴				暗灰黄	にぶい 黄橙	断面三角突 帯・刷毛状 工具ナデ(横)	ナデ	○	○				灰色石 褐色石	"	
13 48	1 T II 下層一括		壺	胴				にぶい 黄橙	橙	断面三角突 帯・刷毛状 工具ナデ(横)	ナデ	△	△				褐色石 他	"	
13 49	C区IV層 No1682		壺	胴				黒褐	にぶい 黄橙	断面三角突 帯・刷毛状 工具ナデ(横)	ヘラ状工具 ナデ	○	○					"	
13 50	C区V層 No1119		壺	胴				にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	断面台形突 帯・ハケ目 (縦)	ハケ目(縦) 後ナデ	○	△				褐色石	"	
13 51	C区VIII層 No2032		壺	胴				にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	工具刻目(V) ハケ目後ナ デ	ハケ目(斜) 後ナデ	◎	◎				白色石	"	
13 52	C区VIII層 No1971		壺	胴				にぶい 橙	にぶい 黄橙	工具刻目(V) ナデ	ハケ目(縦) 後ナデ	◎	◎				白色石	"	
12 53	C区V層 No628 No649, 一括		壺	底		2.0		灰褐	にぶい 橙	ハケ目(縦)	指頭圧痕・ナ デ	△	△				褐色石	"	外面に煤付着。
13 54	C区IV層 No1696 No1814		埴	胴				橙	橙	ヘラ状工具 ナデ後ナデ	ヘラ状工具 ナデ後ナデ	○	△	○			褐色石	"	
14 55	C区V層 No1000		高杯	杯				にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	指頭圧痕・ナ デ	指頭圧痕・ナ デ	○					褐色石	"	
14 56	C区IV層 No1541		高杯	杯～ 脚				橙	にぶい 黄褐	ミガキ(縦)・ ナデ	ナデ	○	○	◎				"	
14 57	C区VI層 No927		高杯	脚				明赤褐	にぶい 浅黄	ミガキ(縦)	ヘラ削り					○		"	
14 58	C区Vb層 No668		高杯	脚				灰白	橙	ミガキ(縦)・ ハケ目(縦)	工具による ケズリ	○	◎	○			赤褐色 石	"	
14 59	C区V層 No1240		高杯	脚				にぶい 黄橙	にぶい 橙	ナデ	工具によるケ ズリ後指ナ デ	○	◎			○	灰白色 石	"	
14 60	C区IV層 No528 Va層 No690		高杯	脚				浅黄	浅黄	ヘラケズリ (縦)後ナ デ	ナデ	○					褐色石 灰色白	"	外側剥落。
14 61	C区V層 No1038		高杯	脚				にぶい 橙	にぶい 橙	ヘラケズリ (縦)後ナ デ	指ナデ		○		○		褐色石	"	
14 62	C区IV層 No1694 No1814		高杯	脚		11.2		橙	橙	ミガキ(横)・ ナデ	ミガキ(横)・ 指ナデ	○	○				赤色石 褐色石	"	
14 63	団体営6 T No11 No19 No22		鉢	口縁	11.9			にぶい 橙	にぶい 橙	指ナデ・指押 さえ	指ナデ・指押 さえ	○	○					"	
14 64	C区Vb層 No655		鉢	杯				浅黄橙	灰白	ハケ目(縦)	ハケ目(横)	○						"	
14 65	C区VIII層 No1994		鉢	底		8.0		橙	にぶい 橙	ヘラ状工具 ナデ(縦)・指 頭圧痕	磨滅	○	○	○			褐色石 灰色白	"	
14 66	1 T II 層 No110		鉢	底		8.5		にぶい 褐	にぶい 褐	ナデ	ヘラ状工具 ナデ(剥落)	○					褐色石 灰白色 白	"	
14 67	C区Vb層 No773		蓋?	口縁				にぶい 橙	褐	ミガキ(横)・ 工具ナデ(横)	ナデ・指頭圧 頭・ヘラ状工 具ナデ	△	△				灰色石	"	

## 第2節 中世の概要

### 1. 検出した遺構と遺物の出土状況

G-1・2区では、古道が検出され、E・F-2区では柱穴が検出された。古道の埋土からは青磁や陶器が出土している。

包含層の遺物は古墳時代の遺物とともにC区のⅢ層から青磁片や陶器片が出土しているが、出土点数は少ない。

### 2. 遺構と遺物の概要

#### ①古道 (第16図)

G-1・2区の表土層下はⅢ層であった。しかしⅢ層の下層はⅤ層であり、Ⅳ～Ⅴ層は残存しない。古道はⅤ層上面で南北に走る溝状のプランとして検出され、黒色軟質土を埋土とする。この黒色土はⅢ層より軟質である。

埋土中からは青磁や陶器片が出土した。また、握りこぶし大の軽石が多く点在していた。埋土中の遺物は一括で取り上げた。軽石も採取した後に調べたが、軽石製品のような加工痕を伴うものはなかった。

古道は、幅約1m、深さ約50cmを測り、断面U

字型の溝状に掘られており、底面中央を黒色土で盛り上げ、その上面に硬化面が形成されている。

古道の北側は周囲が浅く凹んでいる。ただ、全体的に浅い凹みであるが、古道の東側の凹みは北側に向けて掘り込みが明瞭になり、はっきりとした段を形成する。この凹みは古道と同じ黒色土が薄く堆積している。古道に伴うものかは不明である。

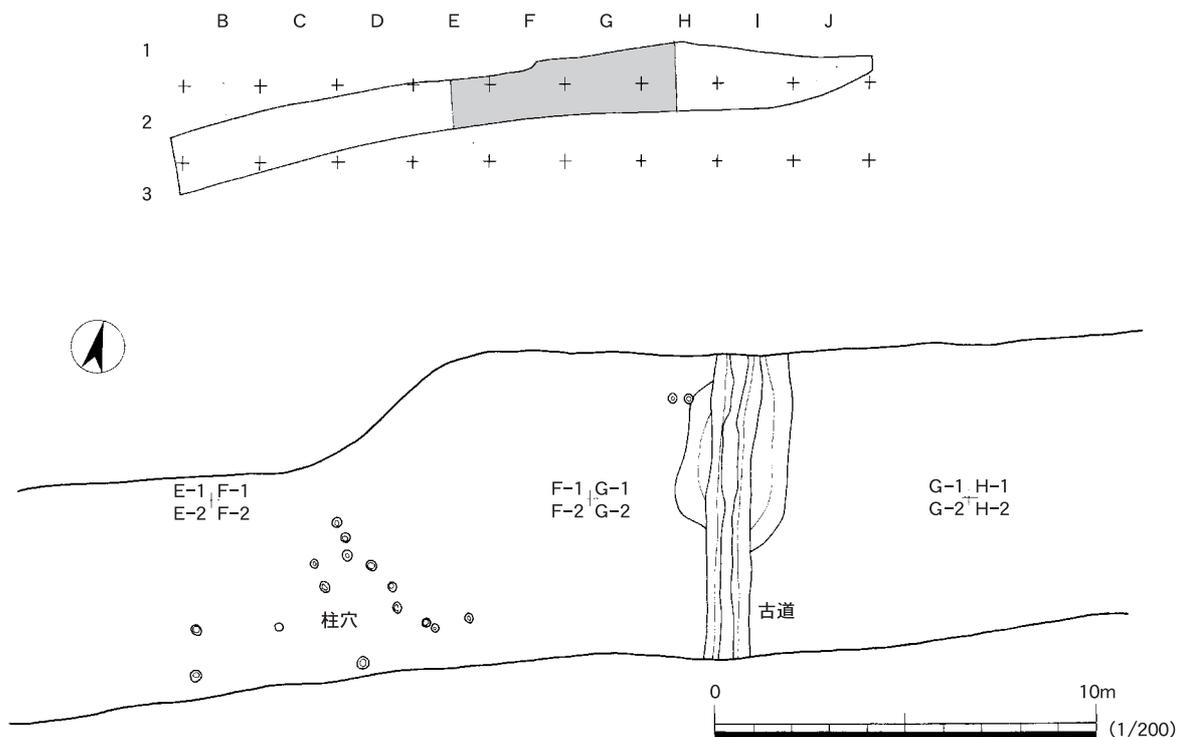
#### 【古道出土遺物 第17図 68～73】

68は土師器である。羽釜の羽部である。

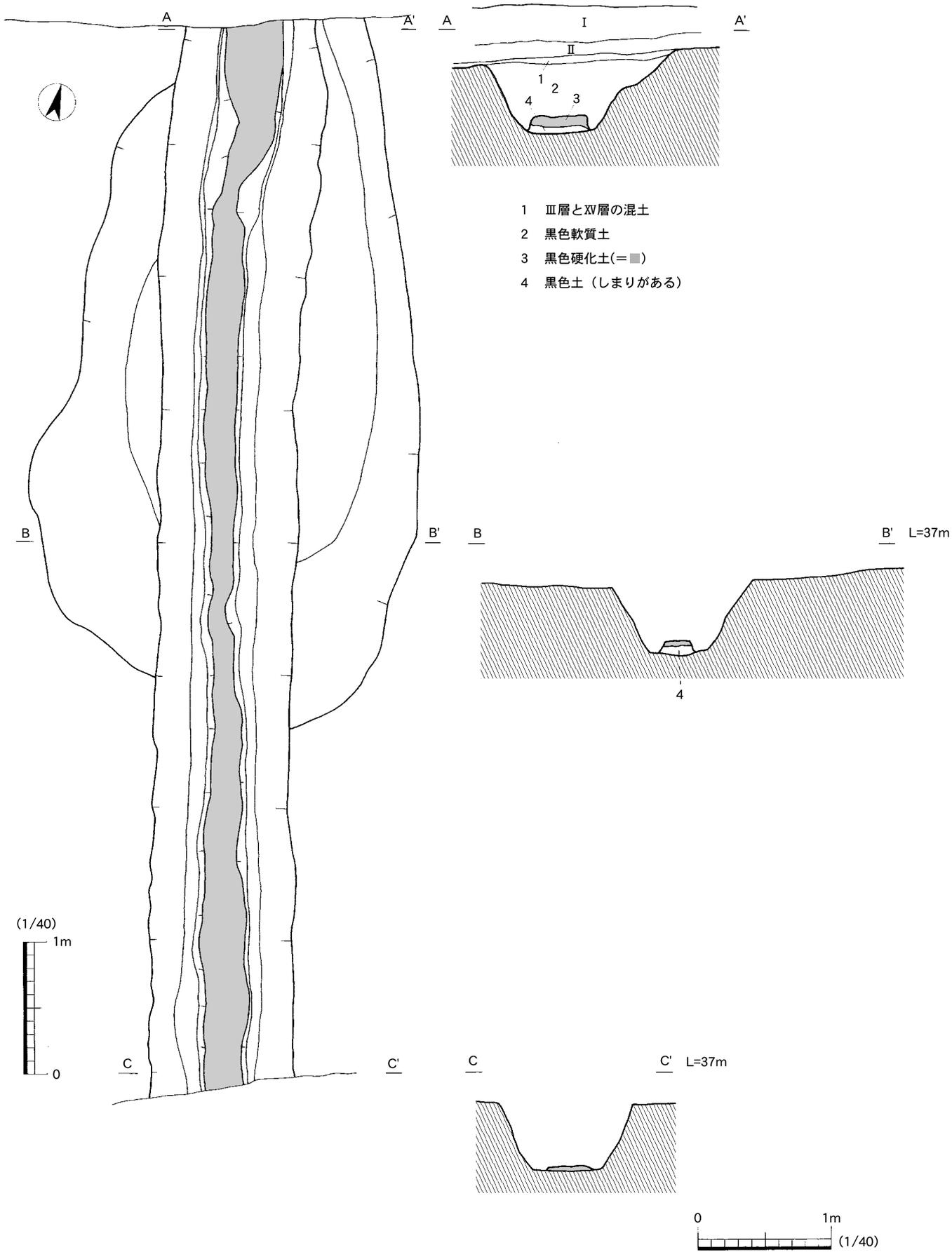
69・70は青磁碗の底部である。いずれも見込みは釉剥がされている。69は高台裏の釉が削り取られている。70の高台内面は無釉である70の高台外面は段が巡り、その段の上部に2.5cm程度の間隔で縦の刻みが施される。

71・72は陶器である。71は備前系の挿鉢である。櫛目5条を1単位とする。72は底部である。器種は不明である。胎土から常滑焼と思われる。

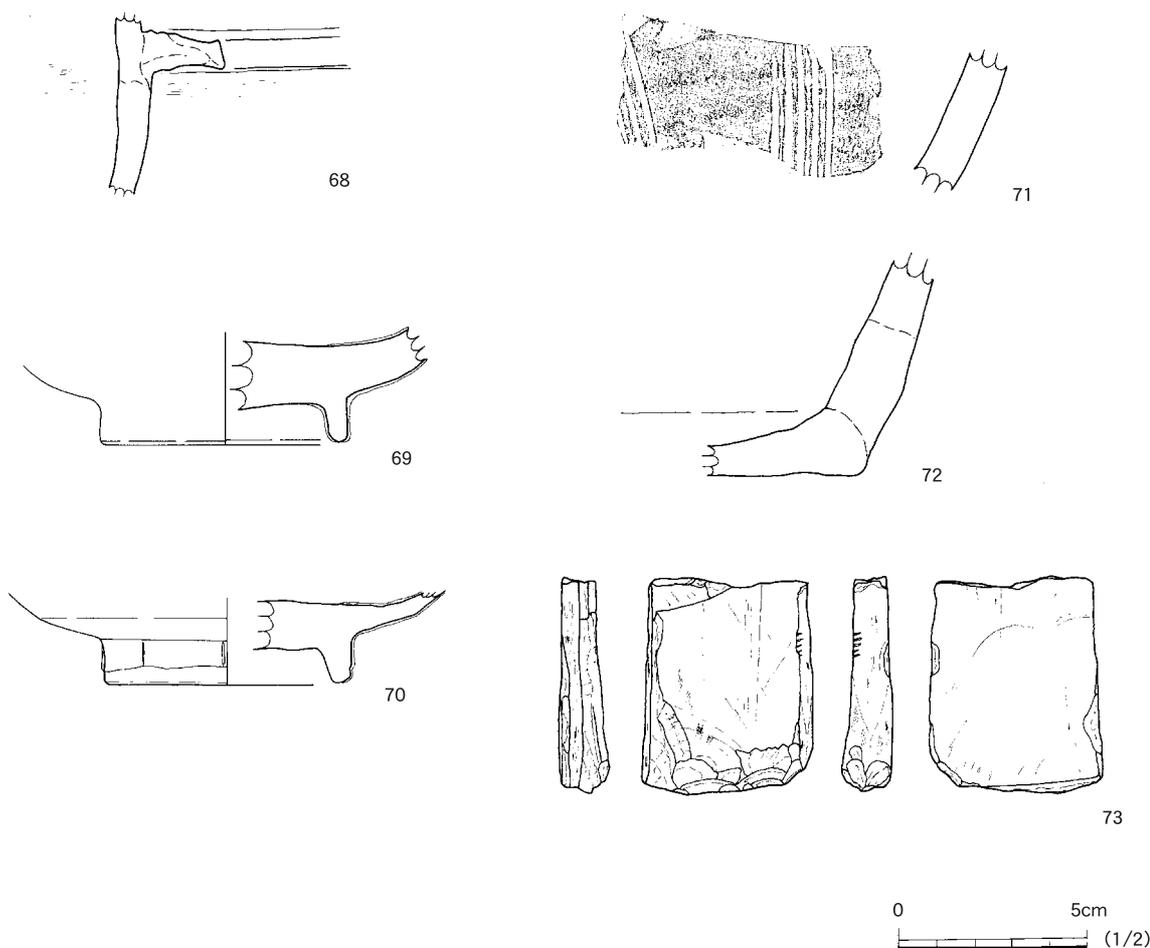
73は頁岩製の手持ち砥石である。正面、裏面、両側面とも砥面を形成する。正面と右側面の角部分には5条の小さな筋状の擦痕が確認される。



第15図 中世の遺構配置図



第16図 古道実測図



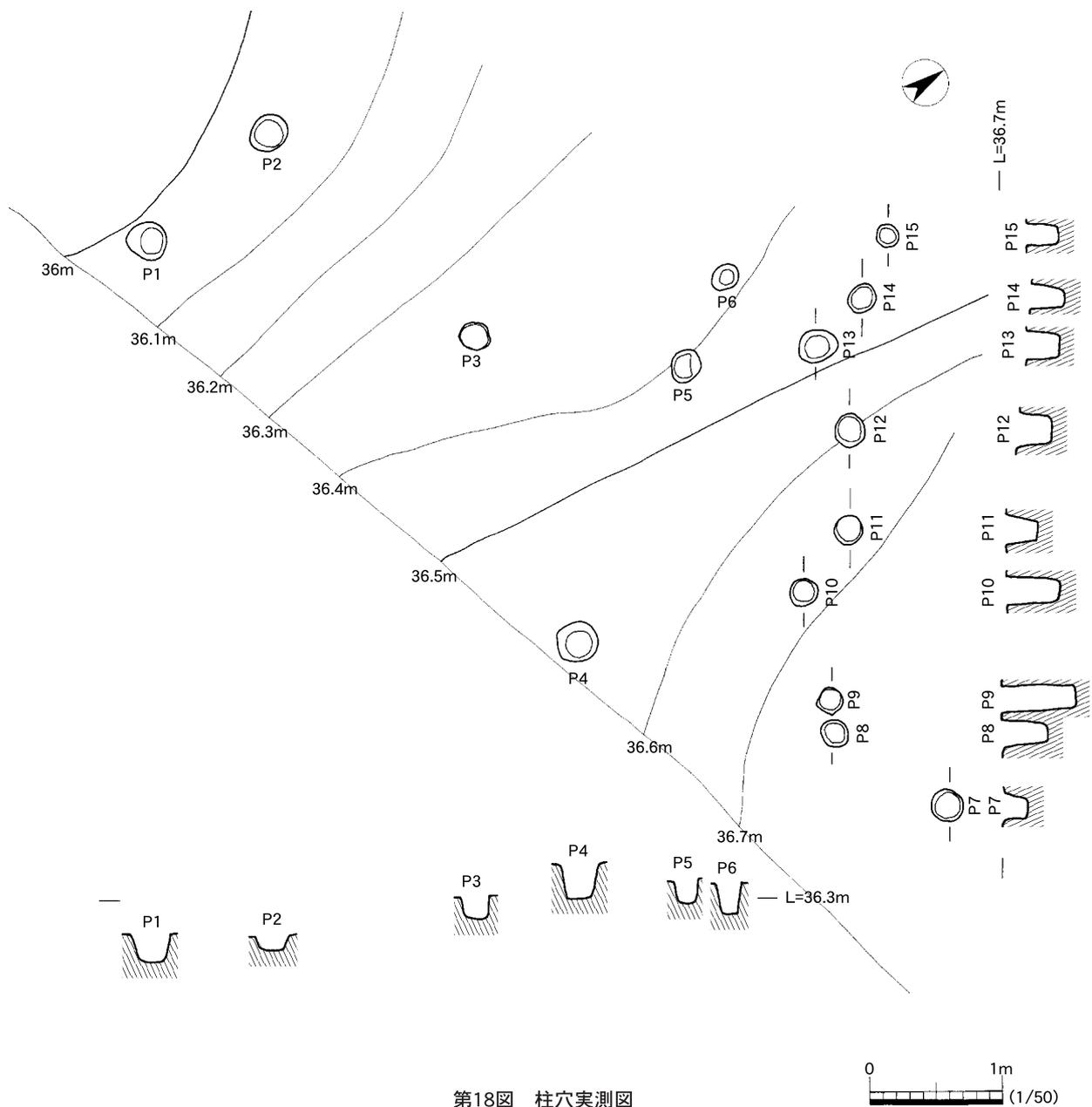
第17図 古道出土遺物

第5表 古道出土陶磁器観察表

挿 図 番 号	レイ ア ウ ト 番 号	出土位置 (取上げ番号)	種類	器種	器 部			色調・ 釉調	文様・調整		胎 土		備 考	
					部位	法量 (cm)			外 面	内 面	色調	特 徴		
						口径	底径							器高
17	68	B区古道一括	土師器	羽釜	羽部				横方向ナデ	横方向ナデ	にぶい 褐	長石・白色石含 む		
17	69	B区古道一括	青磁	碗	底		6.4	緑灰	高台内底面 釉剥ぎ	見込み釉剥 ぎ	灰白		15~16C	
17	70	B区古道一括	青磁	碗	底		6.2	明オ リーブ 灰	高台内面無 釉	見込み釉剥 ぎ	灰白		15~16C	
17	71	B区古道一括	陶器	擂鉢	胴			赤褐・に ぶい赤 褐		櫛目5条1 単位	黄灰	灰褐白色石粒 子含む	備前系。14~ 15C。	
17	72	B区古道一括	陶器	甕・壺	底			赤褐・に ぶい黄 橙			灰黄褐	白色石粒子含 む	常滑焼。14~ 15C。	

第6表 古道出土石器計測表

挿 図 番 号	レイ ア ウ ト 番 号	出土位置 (取上げ番号)	種類	石材	法 量				備 考
					最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)	
17	73	古道一括	砥石	頁岩	5.5	5.5	5.5	54.0	正面・裏面・両側面に研面。5条の小さな筋状の擦痕。



第18図 柱穴実測図

②柱穴（第18図）

XV層上面で黒色軟質土を埋土とする。柱穴からは遺物が出土しなかったため、所属時期の判断は困難であるが、埋土が古道の埋土と同じであることから、中世の可能性が高いと判断した。

掘立柱建物跡を形成する配列は確認できなかったが、P8～P15は直列に近い形で配列する。XV層上面の地形では南西に向けて低く傾斜していく部分である。土層の観察から柱穴が造られたと思われる時期も緩やかに傾斜していることが分かった。

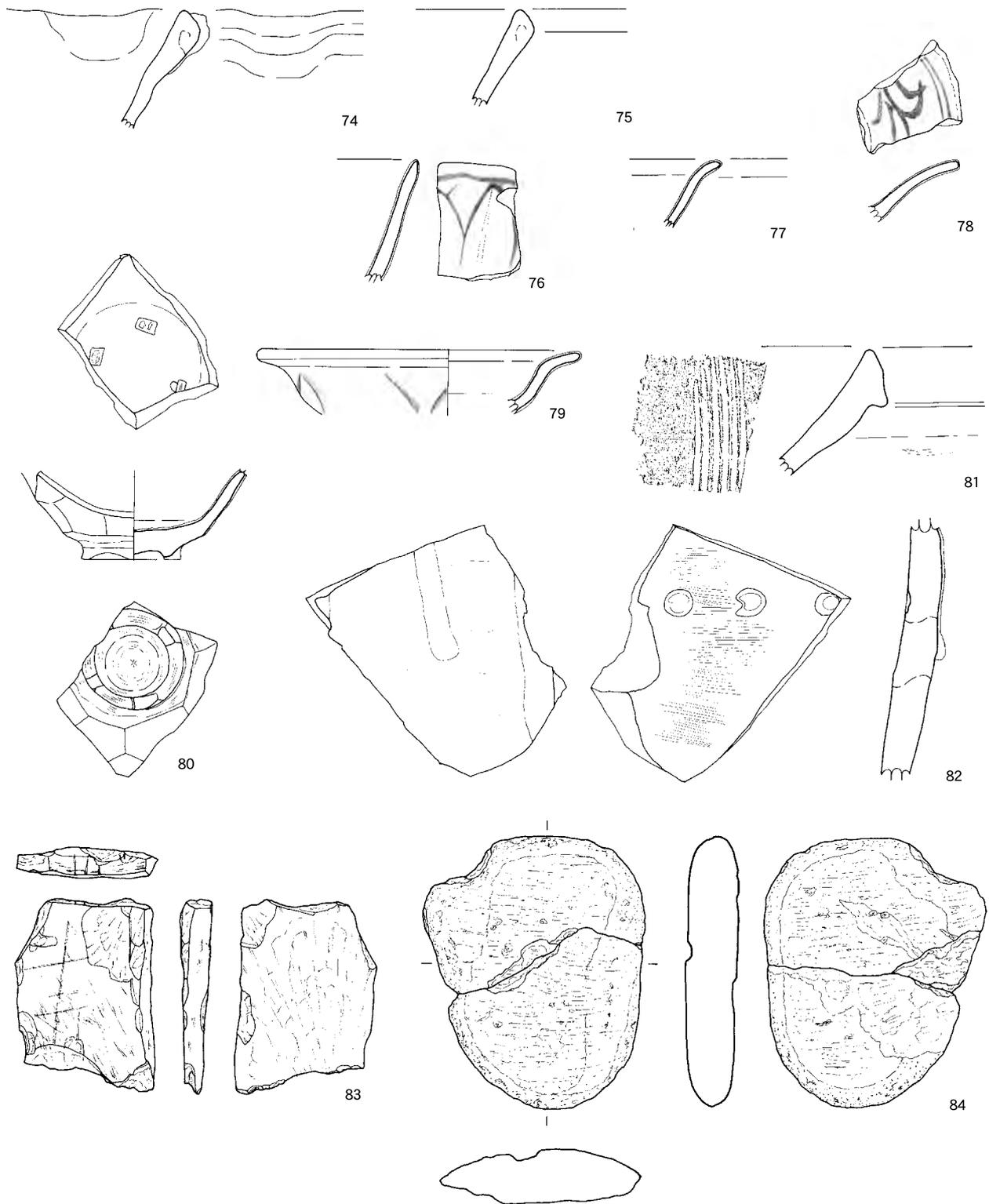
③包含層出土遺物（第19図 74～84）

74・75は東播系捏鉢の口縁部で同一個体の可能性が高い。74には注口部が確認される。

76～79は青磁である。76は碗の口縁部で鎬蓮弁が施される。77は外反口縁皿である。78は稜花皿で、口縁内面に2条の櫛描文と体部内面に花文を施す。79は口折皿で、外面に篋による連弁文が施される。80は白磁の多角杯である。体部外面下部は露胎にしており、見込みに重ね焼成痕が3箇所確認できる。また畳付は4箇所の挟りを入れている。挟られていない箇所は釉が残っている。15世紀後半ごろのものである。

81は備前系の播鉢の口縁部である。櫛目6条を1単位とする。82は胎土から常滑焼と考えられる。外面は深緑色の自然釉が垂れている。内面に3箇所

83は頁岩製の手持ち砥石である。正面、右側面に砥面を形成する。また正面と上面には筋状の擦痕が確認され、上面のものは顕著である。84は軽石製品である。表裏研磨されている。



第19図 中世包含層出土遺物

第7表 中世包含層出土陶磁器観察表

挿図番号	レイアウト番号	出土位置 (取上げ番号)	種類	器種	器 部			色調・ 釉調	文様・調整		胎 土		備 考	
					部位	法量 (cm)			外 面	内 面	色調	特 徴		
						口径	底径							器高
19	74	C区V上層 No.986	陶器	捏鉢	口縁						灰黄	白色石粒子	東幡系。注口 部あり。13C 代。	
19	75	C区IV層 No.489	陶器	捏鉢	口縁						灰黄	白色石粒子	東幡系。13C 代。	
19	76	B区II層 No.28	青磁	碗	口縁				灰オ リーブ	鎬蓮弁文	灰	胎土精緻	13C代。	
19	77	C区III層 一括	青磁	皿	口縁				灰オ リーブ		灰白		15~16C。	
19	78	C区III層 一括	青磁	皿	口縁				黄褐	2条の櫛描 文と花文	灰白	胎土精緻	15~16C。	
19	79	C区一括	青磁	皿	口縁	10.7			明オ リーブ 灰	篋による蓮 弁文	灰	胎土精緻	15~16C。	
19	80	C区一括	白磁	坏	胴~底		3.4		灰白	畳付に4箇 所の抉り	見込みに重 ね焼成痕	灰白	黒色粒子含む	削りだし高 台。15C中 頃。
19	81	C区一括	陶器	搦鉢	口縁						櫛目6条1 単位	黒褐	白色石含む	備前系。14~ 15C。
19	82	C区一括	陶器	壺	胴				灰オリーブ 色釉垂れ	3箇所の凹 み	褐灰	白色石含む	常滑焼。14~ 15C。	

第8表 中世包含層出土石器計測表

挿図番号	レイアウト番号	出土位置 (取上げ番号)	種類	石材	法 量				備 考
					最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)	
20	83	C区III層 No.278	砥石	頁岩	7.5	4.7	1.2	36.8	正面・右側面に砥面。正面・上面に筋状の擦痕。
20	84	C区III層 No.46	軽石製品	軽石	9.1	7.3	1.7	42.5	

### 第3節 近世の概要

#### 1. 検出した遺構と遺物の出土状況

H・I-1・2区で、方形土坑及び柱穴を検出した(第20図)。柱穴については埋土から近世のもの判断した。掘建柱建物跡を形成する配列は確認できなかった。H・I-1・2区は表土の下層はすでにXV層であり、近世の遺構が検出された周囲のみII層が残存していた。

遺物はほとんど方形土坑周辺に集中するが、出土量は少ない。

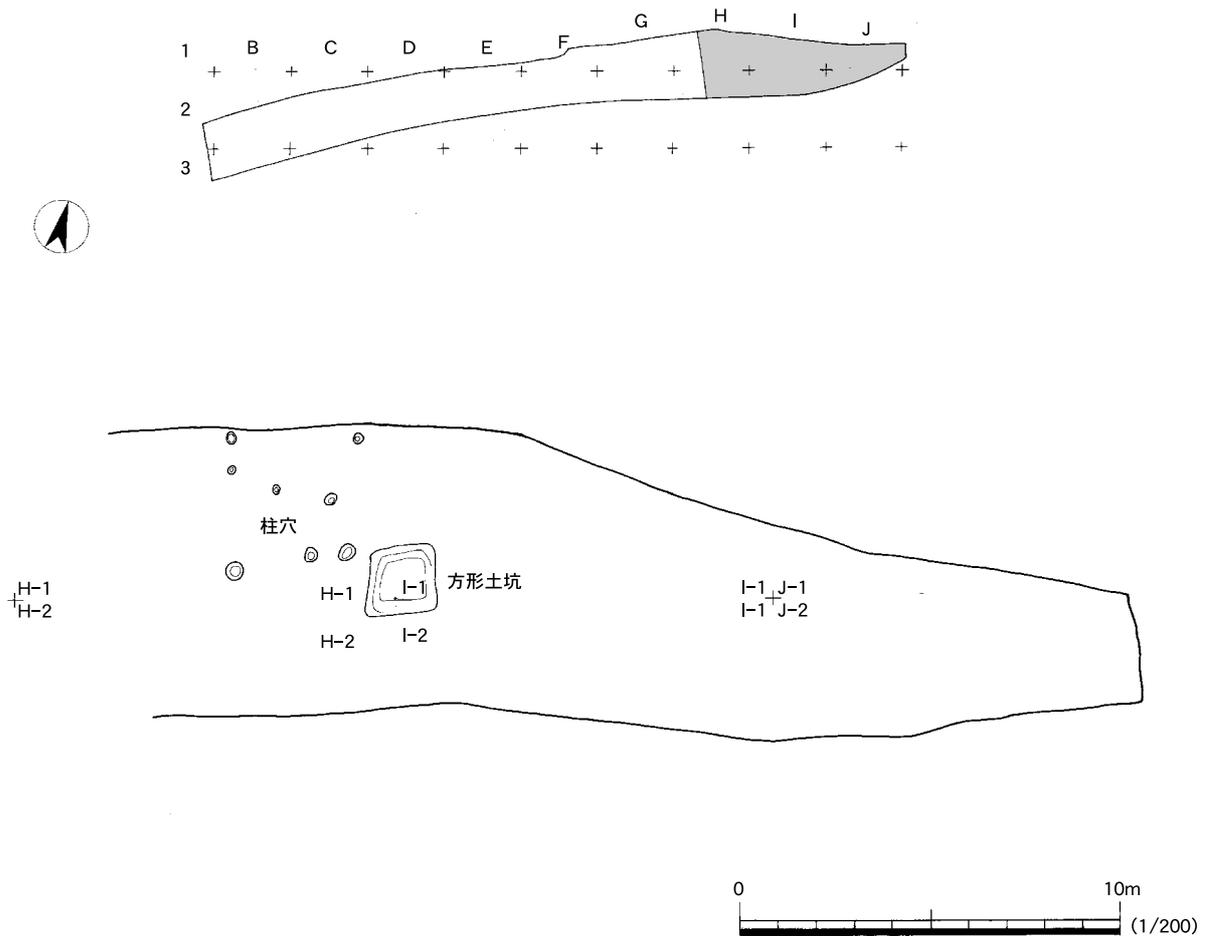
#### 2. 遺構と遺物の概要

##### ①方形土坑(第21図)

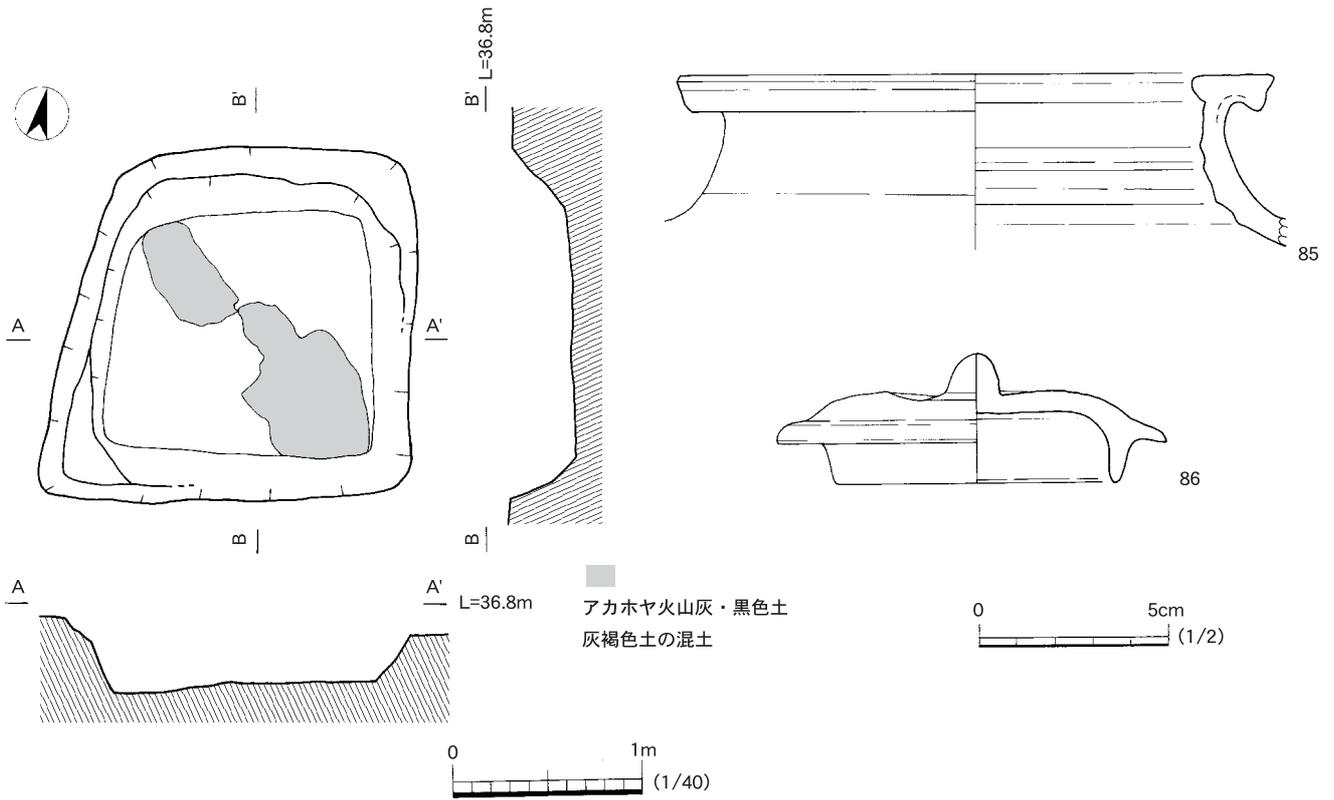
平面185×185cmの正方形プランで、深さは30～40cmを測る。土坑の床面には、北西角から南東角にかけてアカホヤ火山灰や黒色土、灰褐色土などの混土が帯状に貼り付けてあった。土坑の用途は不明である。

##### 【方形土坑出土遺物 第21図 86・87】

方形土坑からは11点の陶器片が出土した。85・86は薩摩焼で、いずれも苗代川焼である。85は壺の口縁部である。内外面ともに施釉がされているが、口唇部は無釉である。86は蓋である。外面天井部にボタン型つまみが付く。



第20図 近世の遺構配置図



第21図 方形土坑実測図及び出土遺物

第9表 方形土坑出土陶器観察表

挿 図 番 号	レイ ア ウ ト 番 号	出土位置 (取上げ番号)	種類	器種	器 部			色調・ 釉調	文様・調整		胎 土		備 考
					部位	法量 (cm)			外 面	内 面	色調	特 徴	
						口径	底径						
22	85	A区II層 No.22(土坑内)・ A区一括	陶器	壺	口縁	15.8			鉄釉	口唇部無釉	黒褐色	精緻	薩摩焼(苗代 川焼)
22	86	A区II層 No.23(土坑内)	陶器	蓋	つまみ ~口唇 部	7.3	3.5		鉄釉	無釉	にぶい 赤褐	白色粒子含む	薩摩焼(苗代 川焼)

②包含層出土遺物（第22・23図 87～99）

87は小碗である。オリーブ色の釉薬が掛けられている。腰部には縦方向・横方向に花卉状の掘り込みがされ、花を意識した文様が施される。蛇ノ目凹型高台である。

88・89は染付碗である。88の高台は張り高台で、畳付に砂が付着する。高台脇、高台外、高台裏に圈線が施される。見込みは蛇ノ目釉剥ぎがされており、釉剥ぎされた部分には別固体の畳付が重なっていた痕跡がある。89は外面に花唐草文が施され、見込みにも圈線と文様が施される。

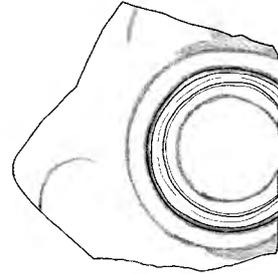
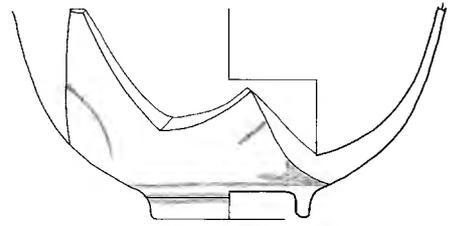
90は染付皿である。外面に草花文、内面に花唐草文が施される。見込みは蛇ノ目釉剥ぎがされており、中央に手書きによる五弁花の一部が見られる。

91～97は薩摩焼である。91・92は龍門司焼の碗である。透明釉を掛けた後、白濁釉を掛け、内面の一部は白濁釉を削り取られている。91・92は同一個体の可能性が高い。

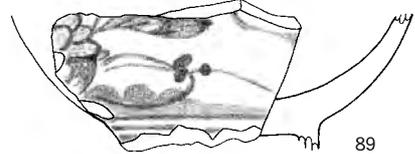
93～97は苗代川焼である。93は徳利の口縁部である。94・95は土瓶の一部と考えられる。94は口縁部で、95は底部である。95の外面には煤が付着する。

96は挿鉢の口縁部である。櫛目4条を1単位とする。97は甕もしくは壺の底部である。98は片口後手形カンテラである。産地は不明である。口縁部から胴部まで白濁釉を掛け、腰部から高台内外面はすべて無釉である。

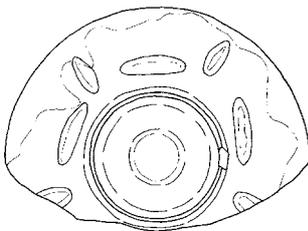
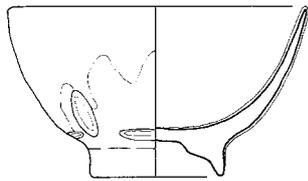
99は真鍮製品である。仏飯器と思われる。



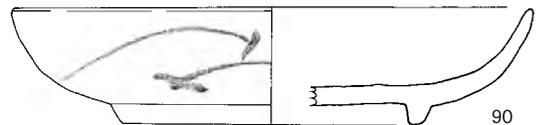
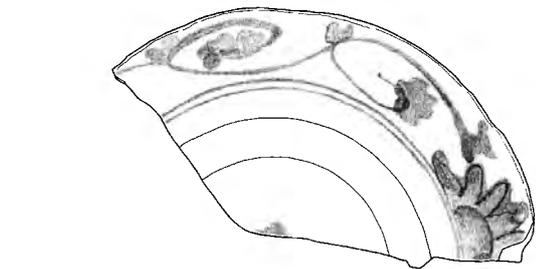
88



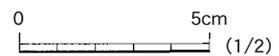
89



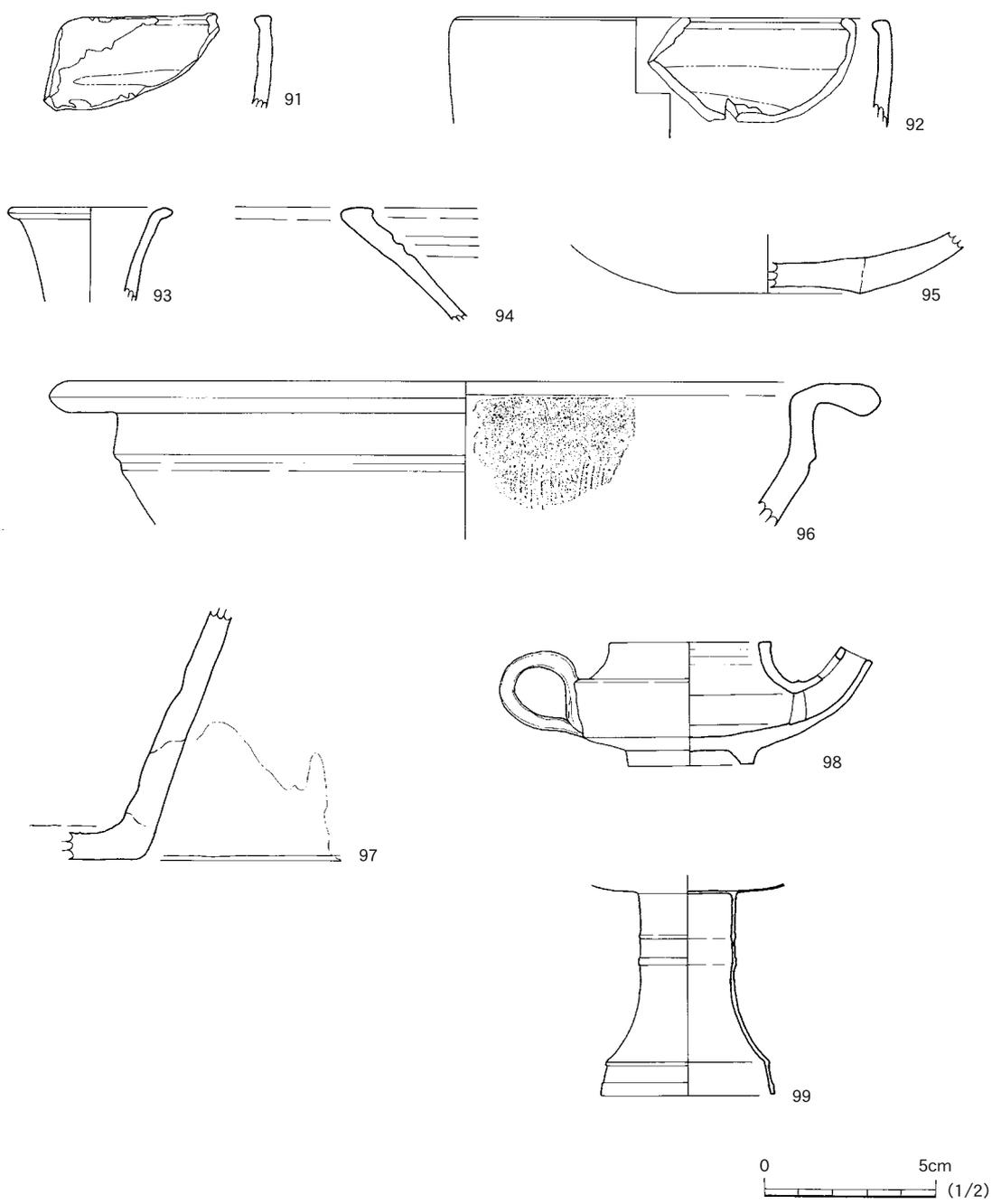
87



90



第22図 近世包含層出土遺物(1)



第23図 近世包含層出土遺物(2)

第10表 近世包含層出土陶磁器観察表

挿 図 番 号	レイ ア ウ ト 番 号	出土位置 (取上げ番号)	種類	器種	器 部			色調・ 釉調	文様・調整		胎 土		備 考	
					部位	法 量 (cm)			外 面	内 面	色調	特 徴		
						口径	底径							器高
23	87	1 T II層 No.115	青磁	小碗	口縁～ 底部	7.8	3.4	4.5	灰オ リーブ	腰部に縦横 方向の錆	白色	胎土精緻		
23	88	A区II層 No.10	染付	碗	胴～底		4.2		明緑灰		白色	胎土精緻		
23	89	C区III層 No.48	染付	碗	胴～高 台脇				明緑灰	草花文	圏線	白色	胎土精緻	
23	90	A区II層 No.3	染付	皿	口縁～ 底部	13.6	7.9	3.1	明緑灰	草花文	草花文	白色	胎土精緻	
24	91	A区II層 No.18	陶器	碗	口縁				1次透明 釉2次 白濁釉 灰白色		一部2次釉 を掻き取る	灰黄	精緻	薩摩焼(龍門 司焼)
24	92	A区II層 No.20	陶器	碗	口縁	12.6			1次透明 釉2次 白濁釉 灰白色		一部2次釉 を掻き取る	灰黄	精緻	薩摩焼(龍門 司焼)
24	93	A区II層 No.6	陶器	徳利	口縁	4.5			鉄釉 黒褐			褐灰	白色石粒子含 む	薩摩焼(苗代 川焼)
24	94	B区東側 IV層一括	陶器	土瓶	口縁				鉄釉 赤褐	凹線2条巡 らす		にぶい 赤褐	白色石粒子含 む 精緻	薩摩焼(苗代 川焼)
24	95	A区II層 No.13	陶器	土瓶	底		5.2		鉄釉 灰黄(白 粉状)	無釉 煤附着		灰黄	白色石粒子含 む	薩摩焼(苗代 川焼)煤附着
24	96	C区一括	陶器	搦鉢	口縁	23.1			鉄釉 黒褐		口唇部釉を 掻き取る。 4条1単位	黒褐	白色石粒子含 む	薩摩焼(苗代 川焼)
24	97	A区II層 No.7	陶器	甕・壺	底				鉄釉後 灰釉 黒褐			黒褐色	灰白色粒子含 む 精緻	薩摩焼(苗代 川焼)
24	98	1 T II層 No.111	陶器	カン テラ	口縁～ 底	4.7	3.7	3.6	白濁釉 淡黄色			にぶい 黄	黒色粒子含む 精緻	注口部に方 形の穿孔

第11表 近世包含層出土真鍮製品計測表

挿 図 番 号	レイ ア ウ ト 番 号	出土位置 (取上げ番号)	種類	器類	器 部				残存重量(g)	備 考	
					部位	法 量 (cm)					
						口径	底径	器高			厚さ
24	99	1 T II層 No.11	真鍮製品	仏飯器	脚		5.0		0.1	64.5	

## 第IV章 調査のまとめ

### 第1節 古墳時代のまとめ

#### 1. 遺構

C-2区VI層で検出した古道については、灰色や灰褐色の土を含む黒色土が表面に堆積し、硬化している。調査の段階でこの灰色や灰黄色の土はⅧ層やⅨ層に見られる粘質土が敷かれ、硬化したものではないかと印象を受けた。少なくとも、古道を検出した上層には、このような性質の土は見受けられないため、自然の堆積によるものとは考えにくい。このことから、単純に当時の人が行き来している間で、形成された道ではなく、ある程度道路として、土を貼るなどの整備の手が加えられているのではないかと推測する。

土器集中区では、甕、壺、高坏、鉢と複数の器種がまとめて出土している。高坏の脚部をのぞき、復元作業の段階で器種がようやく分かるほど細かな小片の集合体であった。出土状況は粉々になった器をまとめて廃棄した印象であり、祭祀のための土器の埋設あるいは設置によって形成される土器の集合体とは異なる。遺物はほぼ古墳時代後半期のものである。

#### 2. 包含層遺物

古墳時代の遺物はⅢ～Ⅵ層に出土した。包含層としてはD-2区で1m近くに及ぶが、この箇所は最もⅢ～Ⅴ層が厚く堆積しており、黒色土の流入による層の堆積と共に流れ込んだものと考えられる。ただし、接合した遺物の分布がある程度のまとまりを持つ傾向もあるので、調査区近辺に土器片群1～3のような廃棄場所が存在する可能性もある。

遺物には弥生時代終末～古墳時代初頭頃と前期、後半期の時期が見受けられる。しかし、後半期の遺物が多数を占める。弥生終末～古墳時代初頭の遺物では安国寺式土器の壺が出土している。前期の遺物としては筒状の脚部を持つ高坏が目立つ。

### 第2節 中世のまとめ

古道は、幅1m、深さ50cm程で、断面U字型の溝状に掘られており、底面中央を黒色土で盛り上げ、その上面に硬化面が形成されていた。本町の金丸城跡でも検出されている。金丸城跡では、近世の遺物

が埋土から出土していたため、近世頃まで使われていたのではないかとしているが、美堂A遺跡に関しては出土遺物から15世紀頃を中心に使われていたと考えられる。

#### 2. 包含層遺物

遺物は古いもので13世紀頃の東播系の捏鉢、青磁碗が出土している。また陶器類は14～15世紀頃、青磁皿・白磁の多角杯などは15～16世紀のものである。中世の遺物については数量が少ないため、考察の余地は無い。しかし、本遺跡から300m南側に胡摩ヶ崎城跡(1190年頃～1357年)が存在する点では、貴重な資料が得られたと思われる。

### 第3節 近世のまとめ

近世の遺構については用途不明である。遺構内・包含層からは薩摩焼を中心に出土している。薩摩焼は18世紀代のものが中心となる。肥前系の染付からもほぼ同時期であると考えられる。

### 第4節 考察

古墳時代については、ほとんどが流れ込みの遺物が多かったが、甕、壺、高坏、鉢がこの調査区の中で一揃いした。高坏は祭祀用としての印象が強いが、古墳時代後半期には食器として増加する点からも、この遺跡の出土土器は生活用品として機能していたと考えられる。周辺に何らかの生活の営みがあった可能性がある。

町内で現在調査された遺跡で、古墳時代については墓域おける資料がほとんどであるが、今回初めてまとまった形で生活用品としての遺物を得られた。

#### 【参考文献】

- 大崎町教育委員会(2004)『金丸城跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- 大崎町教育委員会(2004)『下堀遺跡・大崎細山田段遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
- 大崎町教育委員会(1988)『中世の城跡』文化財研究誌第6集
- 救仁郷断二(1951)『大崎町史』
- 中村直子(1987)「成川式土器再考」『鹿大考古』第6号 鹿児島大学法文学部考古学研究室
- 中世土器研究会(1995)『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 九州近世陶磁学会(2000)『九州陶磁の編年』

圖 版



C区古墳時代遺物出土状況



D区古墳時代遺物出土状況

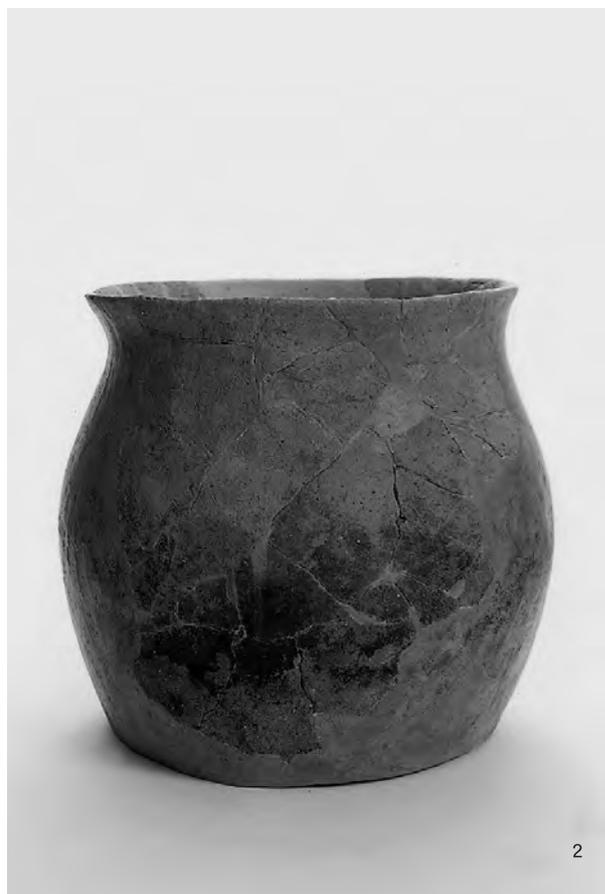


土器片群 1・2

図版 2



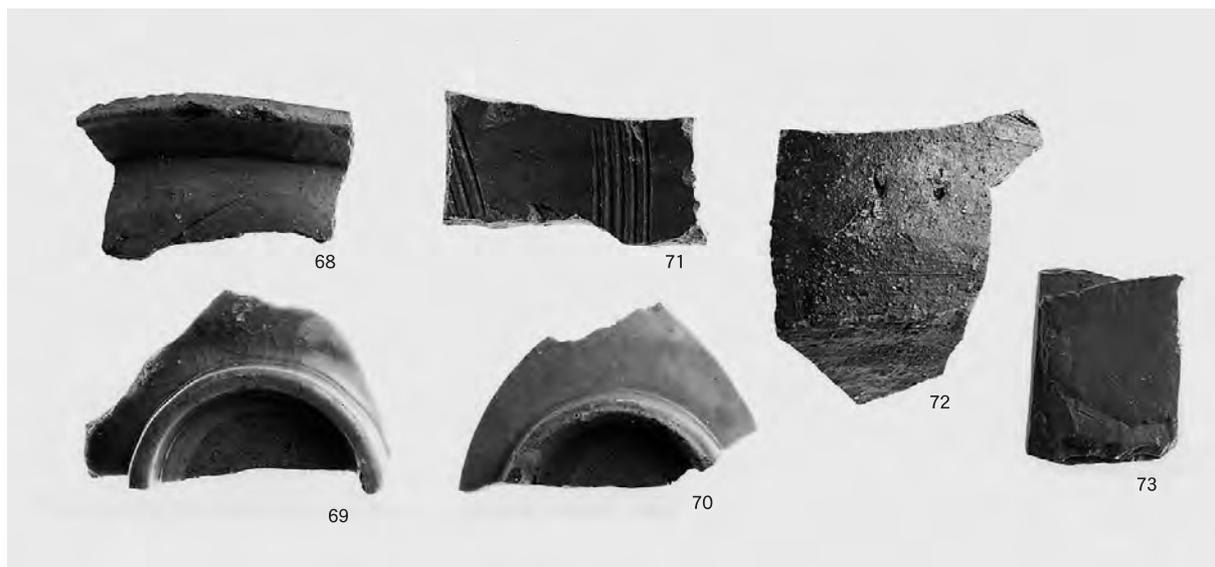
古墳時代 ①古道 ②土坑／中世 ③古道遺物出土状況 ④古道完掘状況 ⑤柱穴／近世 ⑥方形土坑及び柱穴 ⑦方形土坑 ⑧土層断面（1トレンチ）



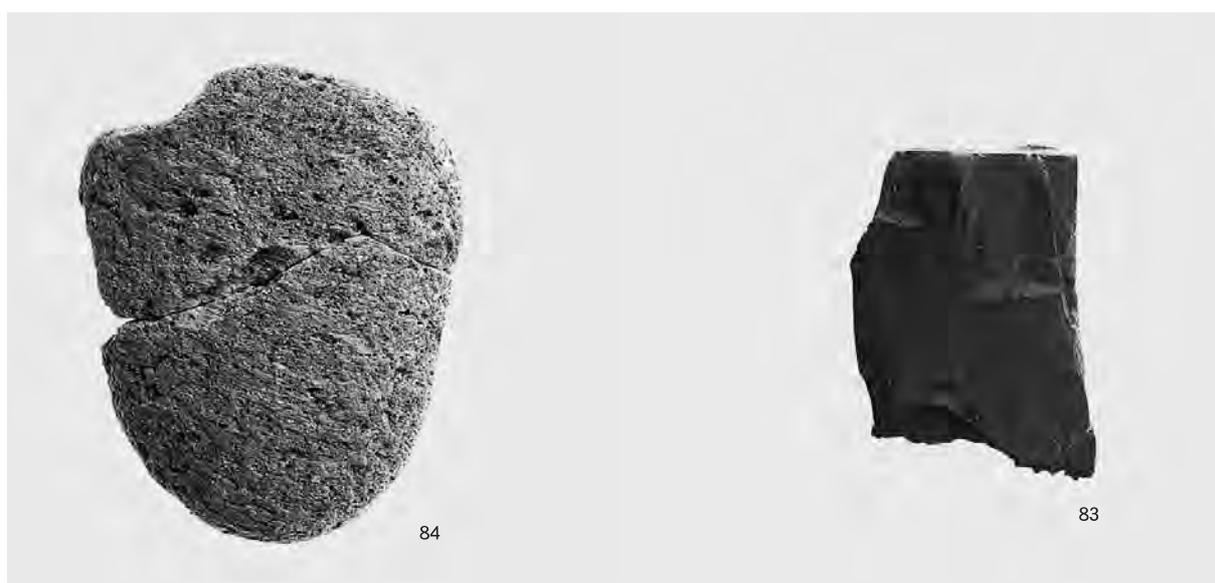
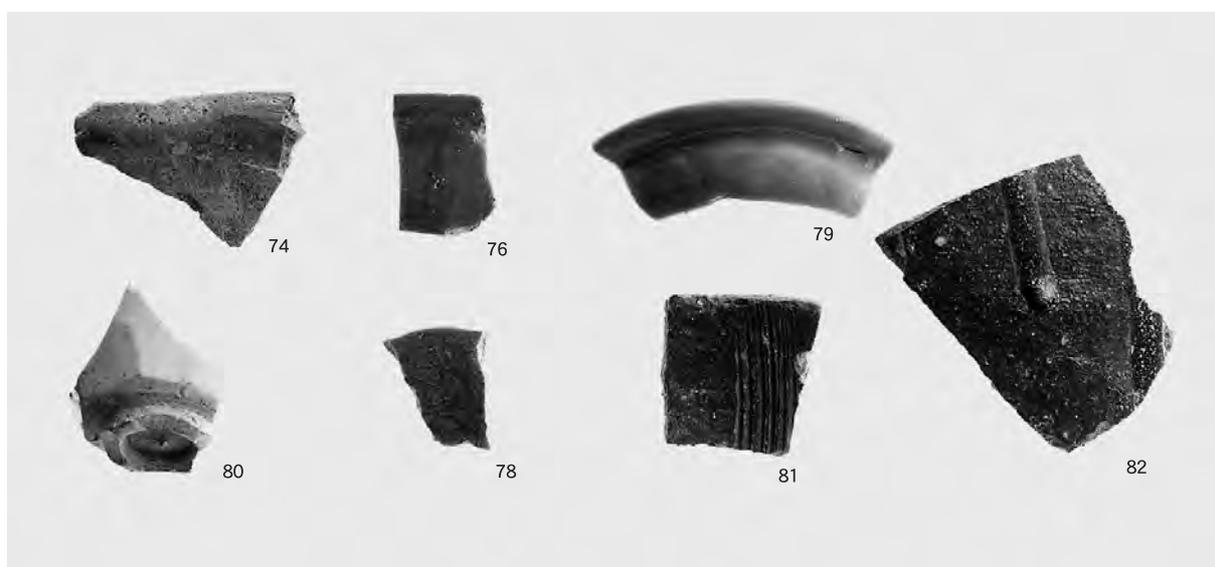
古墳時代出土遺物 (1)



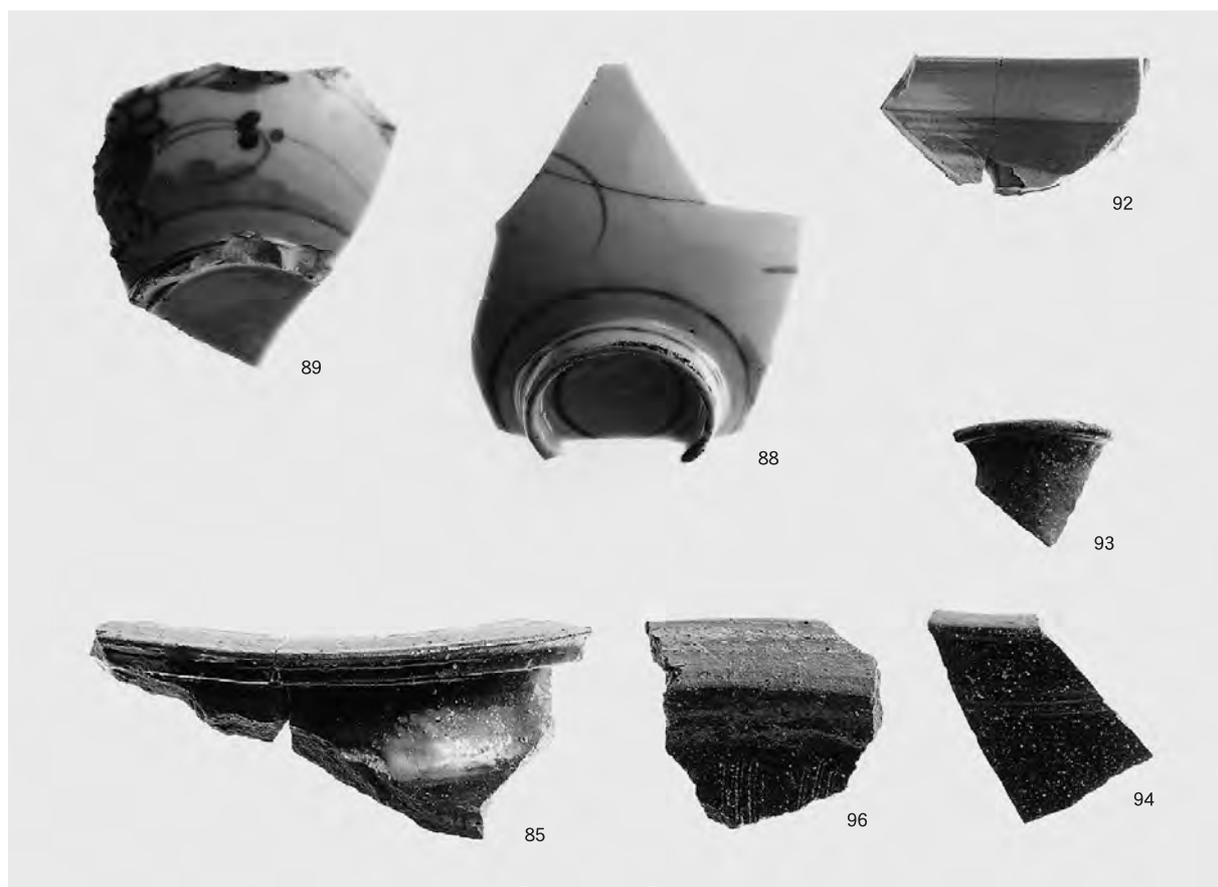
古墳時代出土遺物 (2)



中世古道出土遺物



中世包含層出土遺物



近世出土遺物

## あ と が き

この調査は、平成14年度に実施したのですが、前年度に突然「来年度工事をするから調査をしてほしい」という大隅耕地事務所からの申し出があり、慌てたのを覚えています。すでに別事業で発掘調査計画が出来上がっていた時のことでした。その別事業もまた差し迫っており、その中にこの調査期間をねじ込むのはかなり痛いものでした。まして、確認調査すら行っていなかったので、どのように予算を立てるべきか悩みました。県文化財課を含めて協議を行った結果、2ヶ月で確認調査から全面調査まで済ませるという結論に至りましたが、今思えばすごい賭けです。確認調査で何もでなければ良いが、おびたしい遺構・遺物が出たら・・・。

確認調査では、遺物が出土し、全面調査を行うこととなったわけですが、当初は楽観的でした。調査区の半分はすでに古墳時代の包含層が失われていたし、1Tも2Tも遺物が出ているが、掘削深は深くないと考えていたからでした。しかし、実は1Tと2Tの間に谷があって、そこに深く黒色土が堆積している。しかもいくら掘っても土器片がどこまでも出てくるし、検出面である池田火山灰層上面にたどり着かない。一転して調査はスピードアップを図らなくてはならない状態に陥りました。全く風のない蒸し暑い日も、土砂降りの日も、作業員さんと一緒になって掘り下げを行いました。調査は無事予定期間内で終了できましたが、今報告書作成段階でいかにこの時の調査が荒らかったのが良く分かりました。まず、現場の写真がびっくりするほど全くいいものが無かったことでした。また、図面にレベルを記入し忘れたなど・・・。なによりも、この調査からどんな情報を引き出そうとしたかの形跡すら無い。

今回の美堂A遺跡の調査は調査から、報告書作成までほぼ一人で行い、手探りで仕上げたものです。逆に今後の調査はどうあるべきかを考える反省材料がたくさん見つけることができました。

最後にプレハブ無しのテント休憩所しかできなかった状態にあって、作業員さんたちには本当にご協力賜りました。整理作業員さん方にはなかなか行き届かない中、図面の作成にご尽力頂きました。また、先生方にはお忙しい中、いろいろとご指導を賜りました。心からの感謝の意を表し、結びといたします。(U)

大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)

県営農免農道整備事業（大崎中央2期地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

## 美 堂 A 遺 跡

発行日 2006年2月

発 行 大崎町教育委員会

〒899-7305 鹿児島県曾於郡大崎町仮宿1029番地

印 刷 株式会社トライ社

〒892-0834 鹿児島市南林寺町12-6番地